

日本列島への稲作伝来の2段階・2系統説の提起

河野 通明

KONO Michiaki

神奈川大学 名誉教授

はじめに

本稿は、考古学界がこれまで永らく寄り掛かってきた「日本列島への稲作伝来は朝鮮半島から」とする、いわば「稲作伝来の朝鮮半島単系説」に対して、朝鮮半島からの稲作民来住は第1波であり、それに後れて中国江南地方から第2波の稲作民来住があって、この人たちが田植え法を持ち込んで日本の稲作の基本型をつくった、つまり日本列島への稲作民の来住は第1波が朝鮮半島から、第2波は中国江南地方からと2度あったという「稲作伝来の2段階・2系統説」を照葉樹林文化論関連の成果や日本の民俗・民具調査の成果も援用しながら論証しようとするものである。

これまで弥生時代は「稲作の始まった時代」という認識に加えて、佐原真（1987）の提起による「戦争の始まった時代」と捉えられていて、これはこれで妥当な説明なのだが、いま一つ大事な観点が抜け落ちている。それは先住の採集・狩猟生活の縄文人がアイヌ語の基となる縄文語を話していた日本列島に、朝鮮半島から古代朝鮮語を話す異民族の稲作民が北九州に来住し、縄文人を押しつけておもに西日本の平野部に住みついて稲作生活を始めた。さらにその後、中国長江下流域の呉越地方から江南語（越語）を話す稲作民が南九州に来住し、民族大移動を執行して奈良盆地に攻め入り、朝鮮系稲作民を制圧してヤマト政権の基を築いた、と私は見ているのだが、つまり弥生時代とは、先住の縄文語を話す縄文人と、北九州から入ってきた古代朝鮮語を話す朝鮮系稲作民、さらにその後南九州から入ってきた江南語を話す江南系稲作民の三つの民族集団、あるいは縄文人を東と西で分けるなら四つ

の民族集団が各地で拮抗しながら棲み分ける「日本列島が多民族社会になった時代」だと捉え直す必要がある。

弥生時代は筑紫や出雲・北陸・尾張の人は古代朝鮮語、日向や山陽道・河内・大和の人は江南語を話し、各地の山間部や海辺の海部の人、そして中部・関東・東北の人は縄文語を話しているという多民族・多言語社会だったが、このうち大和・河内を制圧した江南人が政権を握り、やがて律令国家を築いて全国を支配したため、彼らの話す江南語が公用語となり日本語に進化した。そのため長い時間をかけて日本語が地域的にも階層的にも滲透し、筑紫・出雲・北陸・尾張の人も関東・東北の人もやがて母語を話せなくなった。また生活様式・生活習慣も地域の個性が徐々に薄まり共通要素が増えていったようだ。

よく政治家が「日本は単一民族社会だ」といって批判を受けているが、その際、反論に持ち出されるのがアイヌと沖縄で、「だから日本は単一民族ではない」という論理なのだが、裏を返せばその学者先生も含めて本州・四国・九州は単一民族だと思い込んでいることになる。本州・四国・九州についていえば「単一民族」なのではなく、多民族社会が長い時間をかけて「単一民族化した社会」なのである。北海道と沖縄が中央政府に取り込まれ始めるのは近世初頭だが、その近世初頭は本州・四国・九州の単一民族化がひとまず達成された時期であり、したがって弥生時代から戦国時代までの時期の本州・四国・九州の単一民族化の過程が中央からと各地域からの双方の視点から研究され、教科書に反映されて若い世代に伝えられ、また地域社会に還元される必要がある。

1989年ベルリンの壁崩壊、1990年東西ドイツ統一、1991年ソビエト連邦解体という流れの中で、これで長かった冷戦が終わり平和が来るのだと期待したが、現実各地で民族紛争が激化して21世紀は民族紛争の世紀になってしまった。また少子高齢化が進む中で外国人労働者も増え、さらに多くの外国人に頼らなければ日本の将来は成り立たなくなると予想されるが、その深刻な現実をよそに教科書では「稲作民の来住」という在来縄文人が思わず身構える緊張した事態の中、日本列島が多民族化する場面も「稲作の伝来」という人の姿の見えない表現で軽く流され、その稲作を縄文人は素直に受け容れて「縄文系弥生人」となり、「渡来系弥生人」と仲良く共存して、いわゆる民族問題はなかったというお伽噺のような平和な世界が描かれている。将来を担う世代を育てる教科書がこれでいいのか。私は「稲作の伝来」という言い回しを「モノ主語話法」、「稲作民の来住」を「人主語話法」と名づけているが、次世代を担う若者に歴史を語る場合は、モノ主語話法ではなく人主語話法で「人の歴史」として語る必要があるのではないかと考えている。

戦前の皇国史観に代わって戦後歴史学のもと、古代・中世・近世と社会構造の変化は捉えられるようになったが、民族形成史の観点が抜け落ちていて、それを何とかしなければならぬというのは、かつて中学校の教壇に立ちながら中学教科書の執筆にも当たっていたところからの懸案の課題であったが、行動を起こさないと時間が過ぎるばかりなので、今回取り組んでみることにした。

折りに触れて話題となる「東日本と西日本の文化の違い」は日本列島がかつて多民族社会であったことの痕跡であり、網野善彦『東と西の語る日本の歴史』（1998）は史料を博搜して東日本と西日本の文化・習俗の違いを見事に描き出したが、なぜそうなったのかについては踏み込んでおらず隔靴搔痒の憾みが残る。多民族社会日本が単一民族化していくプロセス説明は、東日本と西日本の文化の違いの原因を突きとめようとする取り組みでもある。

私が第2波と見ている江南系稲作民の来住については、「文明の環境史観」を提唱されている安田喜憲氏によって『古事記』『日本書紀』に記されている神

武東征の話は、長江下流域の越の稲作民の日本列島来住の反映であるとされていて（安田2004、2012）、我が意を得たりと大賛成だが、細部では意見の違いもあり、また神武東征を史実と扱うには「記紀の神武東征伝説は政府の立場から創作されたものだ」とする文献史学界の盤石の常識に対してはもう少しきめ細かい対応も必要であり、それには紙幅を要して一論文の容量をはるかに超える。

そこで論考を前編・後編に分けて、前編にあたる本稿では、日本列島への稲作民の来住は朝鮮半島と江南地方からの2系統で2度あったという痕跡を民俗学や民具研究の成果から集め、分かる範囲での考古学の成果も加えて考古学・文献古代史・イネ学・民族学・民俗学・民具研究の共有財産となるよう丁寧に説明し、別タイトルの後編では『古事記』『日本書紀』の編纂過程に踏み込んでどの部分が編纂時の加筆でどの部分が史実の反映と見ることができるかについての私なりの見分け方を提示し、天孫降臨からその後の歴史過程の大まかな見通しを立てて、私の目から見た安田説の問題点も指摘できればと考えている。

本稿は何か新奇で突飛な尖った提案をしようとしているわけではない。永年にわたって考古学が蓄積してきた朝鮮半島からの稲作民の来住を第1波とし、照葉樹林文化論・長江文明説の流れの中で姿を現してきた江南系稲作民の来住を第2波と位置づけて両説の共存を図ろうというきわめて穏当な提案であり、今後の弥生時代研究の分野を超えた共有のプラットフォームを築こうという魂胆なのである。

AMS年代法には態度保留 ここで本論に入るに先立って、国立歴史民俗博物館を中心に進められてきたAMS炭素14年代測定法について一言触れておきたい。藤尾慎一郎『弥生時代の歴史』（2015）によれば、これまで日本の水田稲作は紀元前5世紀ごろに始まったと考えられていたのが500年もさかのぼって紀元前10世紀になったという。その科学的根拠については、素人であり反論する力は持ち合わせていないが、その結論には何か不自然さが残って膝を打つ納得感が得られないので困惑している。日本の稲作の起源については、これまでは中国の戦国時代における戦乱が諸民族

の移動を引き起こし、それに押し出されるように朝鮮半島の稲作民が九州北部に渡ってきて水田稲作を始めた。と東アジア史と連動する形で説明され納得してきたし、時代が降った4世紀末から7世紀の3波の朝鮮系渡来人来住の波については、朝鮮半島内の戦乱の激化、とりわけ百済が国家存亡の危機に直面したり、百済・高句麗が滅亡する時期と見事に重なっていて、これが学界の共通認識となっている。ところがAMS年代法の新年代観に従えば、前5世紀以降の東アジアの激動期に日本列島に逃れてくる人の波が何もなかったことになり、これは到底あり得ないことできわめて不自然なので当面は様子を見ることにし、本稿ではこれまでの年代観にもとづいて論を進めている。

I. 先行研究の概観

日本列島への稲作伝来を考えるには先行研究を一瞥しておかなければならないが、数が多いので本稿の立場から重要と思われる論考について、① 執筆者は日本列島への稲作伝来をどのルートで何回あったと主張しているか、② 論旨については日本列島への稲作伝来を考える上で共有財産にすべき点に絞って紹介することにした。その際、稲作伝来ルートについては、図1に示したように、

Aルート：江南地方→山東半島→朝鮮半島西岸部→北九州の北回りルート

Bルート：中国江南地方から直接九州に渡ってくるルート

Cルート：江南地方→台湾→南西諸島→南九州の「海上の道」ルート

と表現する。

樋口隆康『日本人はどこから来たか』（1971）

樋口氏は日本の稲作がBルートで江南地方から伝わったという安藤広太郎（1951）説を支持し、『魏志倭人伝』は倭人の風俗や物産が東南アジアの僂耳、朱崖（海南島）に同じだとか倭人は自ら呉の太伯の後裔であると信じているとか、篠田統の食事研究から華北ではアワやキビの粉食にヒツジ、ブタの獣肉食なのに対し華南ではコメと魚肉が中心でスシもあり日本と

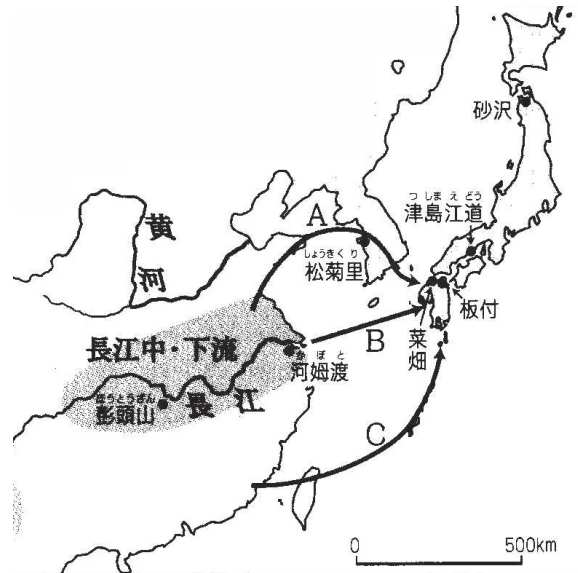


図1 稲作伝来ルート（『日本史 B』2007 三省堂）

共通すること、また考古学から弥生式時代の磨製石器や高床式倉庫は江南系であることなどから、稲作農耕と磨製石器は江南からBルートで九州に入り、金属器は華北系や遼寧系が朝鮮において金属器文化をつくり、朝鮮半島からAルートで日本に入ってきた。つまり弥生式農耕文化は、一民族の大移動によって確立されたもの（単系）ではなく、各方面から入ってきた（2系統）諸要素が日本において総合体として形成されたものが弥生式文化であった、と結んでいる。

この稲作農耕と磨製石器は江南からBルートで、金属器は朝鮮半島からAルートで日本に入ってきた、とする樋口説は、50年前に提起された「弥生文化伝来の2段階・2系統説」ともいえよう。

照葉樹林農耕論

稲作の起源と日本への伝播については1960~80年代にかけて展開された「照葉樹林文化論」は避けて通れない。池橋宏氏のまとめを借りて紹介すれば、中尾佐助の『栽培植物と農耕の起源』（1966）はアフリカ起源の雑穀農耕がインドに波及して、イネの「雑穀としての栽培化」が始まったと主張したが、このインド起源説は後に撤回され、『続・照葉樹林文化』（1976）では、イネの起源地は中国とインドの中間の照葉樹林帯だったとし、ここから「照葉樹林農耕論」が展開されてきた。イネが初め焼畑の雑穀作物であったと見る点では作物学の渡部忠世『アジア稲作の系譜』（1983）も同じで、熱帯よりやや高緯度に展開する「原農耕圏」

を提唱し、イネを雲南起源とした。そして原農耕圏では稲の栽培が焼畑の状況に始まり、その種類は陸稲に近かったと述べ、この稲作が丘陵と山間を降りて、単作の普遍化に伴い大規模な平坦地稲作が展開した、とした（池橋 2005）。こうして雲南高原で生まれた稲作が東にくだって長江流域の江南地方で展開し、やがて日本に伝わるという西から東に稲作文化が伝わるイメージが形成された。

この照葉樹林文化論は池橋氏も指摘するように『照葉樹林文化』（1969）、『続・照葉樹林文化』（1976）、『稲作文化』（1985）という、著名な学者の参加した討論記録が新書の中で展開され、公開討論のような形で一般読者、おもに文化人・読書人層を巻き込みながら進んだところに特徴がある。私もその読者の一人で毎回わくわくしながら電車の中で読み、次の出版を待ちわびていた。同時進行で萩原秀三郎・鳥越憲三郎ら民族学者たちの豊富な写真入り調査報告の出版と相まって柳田国男の一国民俗学の枠内で巣ごもりしていた折りに、窓を開ければ緑したたる新緑が目飛び込んできたような衝撃と開放感を感じ、餅・ちまき・赤米・納豆・なれずし・茶・下駄・草鞋・高床式住居・『魏志倭人伝』の貫頭衣が今も着られていることに驚きと日本文化のふるさとに出逢った懐かしさと同時に、彼らの自然と調和的に生きる様子を見て、高度経済成長期のアメリカ流消費文化にどっぷり漬かっている自分に引き換え、かつての節約しながら質素に暮らしていた日本の生活こそが人類本来のあり方だと見直しを迫られた。

稲作の起源については浙江省の河姆渡遺跡以降、次々と古い遺跡の発見が続いて稲作の長江流域起源説が定着し、雲南地方を稲作起源とした照葉樹林文化論は多くの読者を巻き込んでアメリカ流消費文化に見直し、日本文化の再評価を迫ったという文化運動としての大きな成果も残しながら幕を閉じた。その後照葉樹林文化論の中心にあって牽引してきた佐々木高明氏は『日本文化の多重構造』（1997）論を展開されているが、この論は照葉樹林文化論とは一旦切り離して扱う方がいいと私は考えている。

佐原眞『大系日本の歴史① 日本人の誕生』（1987・

1992）

佐原氏は「佐賀県唐津市菜畑、福岡市板付下層で発見された本格的な水田あと、そして福岡県糸島郡二丈町曲り田で調査された村のあとによって代表される「菜畑・曲り田段階」、すなわち日本最初の農耕文化の状況を学習すると、これが朝鮮半島南部からもたらされたものであることは、いまや 100% 確実といえる」とし A ルートを稲作最初の伝来とし、「なお、右にかかげた主な伝播のほか、稲作文化は何回も各方向から伝わったにちがいない。たとえば、あとでとりあげる高床倉庫の存在は、長江流域からの伝播もあったことを示している」と A・B ルートの朝鮮半島・江南の 2 段階・2 系統説を採っている。

佐々木高明『日本文化の多重構造』（1997）

佐々木氏の『日本文化の多重構造— アジア的視野から日本文化を再考する』は、これまでの照葉樹林文化論は目線は西を向き、稲作を含むことから時代は弥生時代で止まっていたのに対して、日本文化の多重構造論は「照葉樹林文化」に対する「ナラ林文化」、より実態に即しては『ブナ帯文化』（梅原猛ほか、1990）を組み込むことで、目線が東日本にも及び、赤坂憲雄氏の「東北学」という大きな文化運動との接点も生まれ、また文献史家の網野善彦氏の「東日本と西日本の文化の違い」が十分踏み込めなかった縄文時代、旧石器時代にも目線が届くようになって、日本文化を考えるより大きな枠組みとなった。考古学にせよ文献古代史にせよ学界全般の研究の細分化が進む中で、広い視野の「日本文化の多重構造論」が提起された意味は大きい。

日本列島への稲作伝来が単系統は 2 系統説かといえば、雲南地方からの伝来を重視されているので 2 系統説といえよう。

藤原宏志『稲作の起源を探る』（1998）

藤原宏志氏はプラント・オパール分析の専門家だが、『稲作の起源を探る』には示唆に富んだいくつもの新たな視点が提示されている。

① 水田稲作の伝来当初は直播で、移植がはじまるのは後代とする見方がとりわけ農学分野では大勢を占め

ているが、水田稲作では、むしろ直播のほうがより高度な技術であり、稲作初期は移植（田植え）であったと考えるべきではないか。

② 木製農具の樹種をみると、弥生時代中期まではカシ・クスノキなど一次林樹木が多く、弥生時代後期から古墳時代にかけてはコナラ・クスギなど二次林樹木が増える。水田開発がすすむ中で、平野の一次林が破壊されて二次林化する様子の反映であろう。

③ 弥生時代以前のイネ収穫法は石包丁や木包丁による穂刈りであったが、穂刈りの場合、葉の大部分は水田に残されることになる、現在のような株刈りとなれば、葉の大部分が水田外へ持ち出されることになって、水田に残されるイネのプラント・オパール量に大きな差が生じる。弥生時代以降、連続して稲作が行われた水田でイネのプラント・オパール量変遷をみると、古墳時代と奈良・平安時代のあいだで変化があらわれ、この時期に穂刈りから株刈り（根刈り）に転換したとみていい。

④ 弥生時代の水田址で人の足跡が見つかることがある。ひとつは足跡がはっきりして歩いた方向や歩き方、立ちどまったようすまで目に浮かぶほど鮮明なもので、いまひとつは足形がはっきりせず、歩いた方向も定まっていなくて、ただ一面に足跡が広がった状態のものである。前者は水田作業に伴うものとみられるが、無秩序な足跡が残る作業とは、田植えにそなえる地ならしと漏水防止のための踏み跡だったと考えられる。

⑤ 宮崎県東臼杵郡西郷村の田代神社に伝わる御田祭では、注連縄にかこまれて満々と水が張られた神田へ、氏子の若い衆が裸馬で乗り入れ、泥を蹴立てて暴れまわる。その後、主祭神を載せた御輿が神田にかつぎこまれ、今度は御輿が暴れまわる。その後、五穀の豊穰を祈願する神事がおごそかにとり行われ、神事が終わると村中の早乙女が総出で田植えをはじめ20 aほどの神田はまたたくまに緑田に変わる。この暴れ馬神事は蹄耕の名残と考えればよく説明できる。

⑥ 1994年、蘇州市の草鞋山遺跡でプラント・オパール密度の高い場所を探索した結果、馬家浜文化中期の世界最古の水田跡を発見した。水田遺構は小さな谷状の窪みに2～4列にならんでおり、ところどころに井戸状の溜め池が掘り込まれている。水田は不定形であ

区画は1～9 m²ときわめて小さい。高地を削り低地に盛るという均平化（地ならし）作業を行わず、水の集まる溝状低地に水田をつくっている。

⑦ 水田域の低い部分には、井戸状の溜め池が配置されていて、表面水を受けて溜める役割を持っている。水田はたがいに水口でつながれ、さらに水田と溜め池をつなぐ水路も備え、それなりのシステムを構成していることからして、草鞋山水田は最初の水田稲作というより、ある程度発達した段階のものとみるべきだろう。

⑧ いまも長江デルタ一帯で栽培されているマコモ田では6月ごろ前年のマコモ株から再生した萌芽を株分けし、移植栽培が行われていることからすれば、草鞋山遺跡の水田が株分け移植であった可能性もじゅうぶん考えられる、とする。

②の弥生時代後期から古墳時代にかけての二次林化、③のプラント・オパールの減少から古墳時代と奈良時代の間に穂摘みから根刈りに移行したという推定、④の水田址の乱雑な足跡を代踏み跡として⑤の宮崎県東臼杵郡田代神社の御田祭と関連づけたこと、⑧のイネの株分け移植説など引き継ぐべき成果は多い。

若林弘子『弥生文化の源流考』（1998）

鳥越憲三郎・若林弘子『弥生文化の源流考 雲南省仮族の精査と新発見』で若林氏は、中国大陸には「穴居」（ジョウキョ）と呼ぶ土間式住居と「干欄」と呼ぶ高床式住居の二つの住居型式があったとする。簡潔にまとめれば、

穴居＝黄河流域の土間式住居：堅穴式あるいは平地式の住居で、乾燥地なので地面に地炉を掘って煮炊きをし、土足で生活し、椅子式の食卓を使って食事し「牀」つまりベッドを用いて就寝する。畑作民の漢族の住居。

干欄＝長江流域の高床式住居：稲作民の高床式住居で河姆渡遺跡でも確認されている。稲は湿地で栽培したので湿地帯に住居を構えることになり、浸水との戦いを免れず、炊事の火を水から守るために生活面を地面から離して高床にして「床面に切った炉」（いろり）で煮炊きをした。屋内では跣足で生活し床の上で就寝する、となる。

仮族の高床式住居は、倭族一般に共通する「母屋（主

屋)」と「露台」とから構成されている。露台とは「屋根のない床」のことで、母屋には炊事の「炉」が設けられ、この炉を核として就寝・炊事・食事・手仕事などいっさいの居住機能が集められた単棟型の住まいである。

露台は母屋の妻側に母屋の床より少し低くセットされ、母屋へは露台を経て妻側から出入りする妻入りである。露台と地上は梯子によって連絡し、梯子は深く葺きおろした庇の下にかけて雨水を避けている。露台は水稻農耕民としての穀を干す場所として考案されたもので、穀物を干すばかりでなく、赤や青に染めた糸、洗濯物、編み上げた籠や、飲み干した酒壺など、暮らしに必要ないろいろなものを陽に当てるところでもある。

母屋の典型的な間取りは、露台と一体になった開放的な前室と、奥の閉鎖的な後室とから成っていて、前室を「庇部屋」、後室を「奥部屋」と呼ぶことにする。

露台と母屋からなる高床式住居は、奈良県の佐味田宝塚古墳から出土した「家屋文鏡」や、奈良県の東大寺山古墳出土の「鉄刀環頭飾り」でも確認でき、法隆寺伝法堂の前身建物は浅野清博士の考証で730年ごろのものとされるが、これも母屋と露台で構成され、母屋は前室（庇部屋）と後室（奥部屋）とに分かれている。奈良時代までこのような形式の住居建築が存在していたのである、という。

この若林氏の指摘は重要で、日本の床高がほぼ1m以下で床下は人が出入りしない縁の下となった住居を高床式と区別して「ひくゆかしきじゅうきょ低床式住居」と呼ぶことにするが、玄関で履物を脱いで屋内では跣足の畳生活という低床式住居は河姆渡遺跡以来の長江流域の高床式住居の系譜を引く後裔であることが立証されたわけであり、江南系稲作民の日本に來住は若林氏の住居からの考証で確定したといえよう。

寺沢薫『王権誕生』(2000、2008)

寺沢薫『王権誕生』は弥生時代に始まる日本の国家形成過程をエンゲルスなどの理論の枠組みにとらわれずに、考古学の発掘事例の検討からムラからクニへの過程を実証的にたどった力作であり継承したい。稲作伝来については、① 今まで考えられてきた水田稲作

の日本列島への伝来ルートを整理すると、Ⅰ 華北から渤海湾の北を回り、朝鮮半島を南下して伝来したとする「北回りルート」(本稿では扱わず)。Ⅱ 華中から朝鮮半島を経由して伝来したとする「半島ルート」(本稿のAルート、これはさらにa、b、cに細分)。Ⅲ 長江下流域から東海を越えての「直接伝来ルート」(本稿のBルート)。Ⅳ 華南地方から南島経由で伝来したとする「海上の道ルート」(本稿のCルート)の4ルートとなる。

② 稲作の伝来を歴史的にみるとき、水田稲作の初期の伝来ルートとその後のルート、また水稻以前のコメの伝来ルートは分けて考えなければならない。

③ 縄文晩期後葉、玄界灘沿岸地域に最初に伝来した水田稲作が、おもにⅡのルートで朝鮮半島南部から渡來した人々によってもたらされたことは間違いない。こと最初的水稻に関するかぎり、他のルートは可能性が薄い。

④ 私は弥生時代の水田農耕文化の構成を、落葉樹林型と照葉樹林型の二つの重なりにあると思っている。前者は、環壕集落や雑穀畑作と共存した水田稲作をはぐくみ、朝鮮半島南部から玄界灘沿岸に伝わり、弥生文化の骨子となった。後者は一步遅れて伝播した水稻主体の文化で、親水性の強い環壕集落を伴い、弥生文化の肉となったといってもよい、としていて、日本列島への稲作伝来の2段階・2系統説を採っている。

佐藤洋一郎『稲の日本史』(2002)

佐藤『稲の日本史』は、「日本列島への稲作伝来の2段階・2系統説」をDNA鑑定にもとづいて明確に論じていることで重要な論考である。また熱帯ジャポニカ縄文焼畑論も検討しておかなければならない。

DNA データからの稲作伝来2系統説の証明 まず前者から見ていくと、DNAは、遺伝情報の担い手で、4種類の塩基(A、T、C、G)の並びによって必要な情報を書き表しているが、DNAには何の遺伝情報も伝達しないのりしろのような部分が存在し、そこにはTAが何回も何回もつながったようなランダムな配列があり、SSRの型(つまり繰り返し数の違い)を250品種の在来品種について調べるとaからhまでの八つの変形版が知られている。図1はその八つの遺伝子分

布図を東アジアについて見たもので中国には8タイプのすべてが分布していて、SSRの性質から考えるとおそらくここが水稻の故郷なのであろう。朝鮮半島にはaタイプが2/3を占めるがbタイプはない。他方日本の品種のほとんどはaまたはbに限られている。それはなぜか。そのもっとも合理的な説明は水稻が日本に来るときaとbの2タイプだけが来たというものである。またbタイプが朝鮮半島にだけなかった理由は、おそらくそれが中国で生まれ、朝鮮半島を経由せずに直接日本列島にきたからである。

日本の水稻の渡来経路については従来、朝鮮半島から来たという説と大陸から直接来たという説があり対立していた。朝鮮半島説を積極的に唱えてきたのはおもに考古学者たちで、その根拠は農具や稲作に伴う儀礼などが朝鮮半島と日本、とくに九州でよく似ていることにあった。一方後者の説をとったのは、考古学の分野では樋口隆康氏（檀原考古学研究所）らのグループと、農学者の故安藤広太郎氏らであった。今回のSSRのデータは、2つの説はどちらも正しかったということを示している、と稲作伝来2系統説のがイネの遺伝子データから証明できたとする。これは大きな成果で日本の稲作が朝鮮半島からと江南地方からの2系統で伝わったことは、遺伝子レベルでの確認で確定したといえよう。

熱帯ジャポニカ縄文焼畑論 佐藤氏は青森県八戸市風張遺跡から出土した炭化米が2800年前と鑑定され縄文時代後期から晩期にあたること、にもかかわらず縄文水田は発見されていないことから水田を伴わない米の栽培法として焼畑を想定して雲南地方の焼畑を調査し、焼畑農耕では意外と農具を使わないことから農具の出土がないことで農耕がないとはいえないこと、東南アジアの焼畑は急峻な斜面で行っているが、当時の日本は人口密度が低いので、平坦地ではなかったか、その品種は熱帯ジャポニカではなかったか、そして伝来ルートは柳田国男が「海上の道」で示した台湾→南西諸島→南九州ルートではなかったか、とする。

熱帯ジャポニカが縄文遺跡で見つかったことは事実であり佐藤氏は弥生遺跡でも数多く見つかったとする。ならばそのルートは佐藤氏のように図1Cの「海上の道」ルートであろう。ただ熱帯ジャポニ

カが縄文時代から栽培されていたとしても、狩猟・採集生活の補助の域を出ることはなく、本格的な稲作は朝鮮半島や江南地方からの稲作民の来住による完成した稲作の日本列島持ち込みに始まる、というのが大方の一致点のようなので、その点では「本格的な稲作は弥生時代から」でいいのではないか。

宮本一夫『農耕の起源を探る イネの来た道』（2009）

宮本氏は東アジアで農耕が始まったのは中国大陆で、北緯33度の淮河流域から秦嶺山脈にかけての東西線（本稿では秦嶺—淮河線）によって北と南に分けることができ、この線以北から長城地帯までが華北、以南が南方であるが、南方はさらに湖南省と広東省の境の南嶺山脈によって、北の華中と南の華南に分けることができるとした上で、「東北アジアの農耕化4段階説」を提起している。

東北アジアの農耕化4段階説

第1段階は、アワ・キビ農耕が遼西・遼東など中国東北部から朝鮮半島西北部を介して、中南部から東部海岸地域や南海岸地域に広がるとともに、中国東北部からアワ・キビ農耕が沿海州南部からその海岸平野に広がる段階で、紀元前4000年紀後半に当たる。

第2段階は、山東半島から遼東半島を経由して朝鮮半島中南部にイネが広がる段階で紀元前3000年紀後半に当たる。

第3段階は、山東半島から遼東半島を経て朝鮮半島に水田や畠さらにそれに伴う農耕具や加工石器、灌漑農耕が広がり、朝鮮半島でアワ・キビさらにイネが栽培され、無文土器文化が生まれていく段階で、紀元前2000年紀半ばである。

第4段階は、これらが北部九州に伝わって最初の段階から水田などの灌漑農耕を持って稲作が始まる、とするもので、日本への稲作伝来はAルートの朝鮮半島経由単系説となる。

池橋宏『稲作の起源 イネ学から考古学への挑戦』（2005）

イネの品種改良の専門家という池橋氏の著書から専門外の私の学ぶことは多い。本稿のテーマにとって

基本的と思われる指摘を列挙しておく、

畑作と比べた水田の利点 ① 水田は農地を浅い池のような状態にして穀物を栽培するため、水源の維持、灌漑水路の建設、田面均平工事など知力と労力を注いで築造された世界中を見渡してもきわめて特殊な農地である。② 作物の栄養としては土壌中からのチッソ(N)の供給が重要で「地力」とか「土壌肥沃度」と呼ばれているが、畑では有機物に含まれるチッソが酸化されて雨水によって流されてしまうのに対して、水田では土壌は空気から遮断されるのでチッソの酸化は抑えられ、長らく作物に利用される。③ ヨーロッパの農業では畑の地力が維持できないために、一作ごとに肥沃度は低下して年々収量が減る「収穫通減の法則」が問題で、家畜を飼養してその排泄物を利用し、また休閑地を設けて地力の回復に努めた。④ 試験結果でも、水稻は肥料の施用がなくても80%近くの収量を上げるが、陸稲も含め畑作物では40%に留まる。⑤ 畑作では、前作の残りものから病原微生物が蓄積され病害が増えて連作ができないので、ローマ時代には2年に1度の休閑(二圃式)、中世ヨーロッパでは三圃式(2年の輪作と1年休閑)の方式が採られた。それに対して水田では、湛水により土中の好気的な病原微生物は死滅するので連作ができる。⑥ 水田では畔を築いて水を湛えるため、降雨によって土が流れるということはない。⑦ 湛水状態では土壌の極端な酸性あるいはアルカリ性に対して緩和作用があり、またある程度の深さに水を張ると、それに耐えて伸びる草の種類は少なくなる。⑧ その結果、中世のヨーロッパでは、ムギの播種量に対する収穫の割合は4倍であったのに対して、日本の奈良時代の水田では播種量のおよそ25倍の収量が基準であった。また⑨ タンパク質の栄養源として水田や水路などの魚が利用できる、とする。

「稲作の焼畑・陸稲起源説」批判 渡部忠世(1983)の稲作の焼畑・陸稲起源説については、① 大方の稲は水陸両用である。② 水稻に比べると陸稲はいろいろな点で特殊化していて野生的性質から遠くなっている。したがって③ 稲の変化の筋道は、野生イネー水稻ー陸稲であり、陸稲から水稻の性質に戻ることはほとんど不可能である。④ 水田は畔を作って水を湛える人工的施設であり、焼畑から自然に水田が出来たと

考えることはむずかしい、とする。

「一年性野生イネの湿地での種播き栽培化」説批判 一般に行われているこの説については、① 野生イネは基本的には多年性で、茎葉を伸ばし株をはって繁殖する水辺の植物であり、タネをつけて繁殖するのは副業でしかない。もし一年性の野生イネから栽培イネが成立したのであれば、栽培イネの多年性的な特性は説明できない。② 「一年性の野生イネが湿地に種子で播かれて栽培化」説は、イネの直播栽培が雑草の恐るべき勢いで繁茂大変困難だという現実と矛盾する、と指摘する。

「原始苗代での稲の株分け栽培」説 藤原寛志氏のマコモ田を参考にしたイネの株分け移植説に次いで、池橋氏もイネが多年生であることに着目して、①野生イネはすべて水辺の多年性植物で穂は貧弱だが収穫後に刈り株から「ひこばえ」が出るので株分けして植えれば10株以上に増殖できることから株分け繁殖用の「母株圃」だけがあればよく、②草鞋山遺跡の穴列水田を「原始苗代」と位置づけた。③ 再生株は互いに接近しているので互いに交雑が行われ原始苗代では種子を多く落とすようなタイプが年を重ねるうちに優勢となり、多稔タイプに変わっていくだろう。④ フィリピンのイフガオ族は、収穫稲株からとった穂を置いて発芽してくる苗を移植する「穂漬け苗代」を行っているが、ここから種子を播いて苗を育てる苗代が成り立つのであろう、とする。

「原始苗代での稲の株分け栽培」起源説については佐藤洋一郎氏の大略「イネが生えている中で成熟した種子を取ってくるということは、非脱粒性の個体を無意識のうちに選抜していることになり、その繰り返しで急速に非脱粒性の種子の割合が増える。ところが株分けの場合は母集団の中の適当な株を持ってきて植えるだけなので進化的にはなんの力も加わっていない。だからいくら株分けをしても種子作物としてのイネの栽培化には貢献しない」(佐藤2007)という厳しい反論もあるが、③ 再生株は互いに接近しているので互いに交雑が行われ原始苗代では種子を多く落とすようなタイプが年を重ねるうちに優勢となり、多稔タイプに変わっていくだろう、という説明もあり、素人考えだが株分けの際には少しでも稔っても籾の落ちない、

かつ稔りの多い株が選ばれ駄目株は抜き捨てられるので、種子採り方式と同様に急速に栽培化が進むと思うのだがどうだろうか。

脱粒性が低くて粃が良く残った大きな穂は穂摘みの際に見分けが付くので、穂摘み直後に残稈を結ぶなどして印を付け、後に棒でも突き刺して翌春の株分けの際の目印にする。ただこれは草鞋山遺跡の1区画1～9 m²ときわめて小さい本田の場合は有効だが田の面積が大きくなると難しい。そうしたなか穂摘みの際に田の水面に落として拾い損ねた穂から翌春一斉に苗が伸びてくる光景を目にしたことからイフガオ族のような穂漬け苗代の発想が生まれたのであろう。

草鞋山遺跡の穴列水田を藤原氏は本田と扱い池橋氏は母株圃の原始苗代と位置づけたが、草鞋山遺跡には穴列水田以外に本田に相当する遺構が見つからないので穴列水田が本田とする藤原説を支持したい。

松木武彦『列島創世記』(2007)

松木氏は「水稻農耕の伝来」の小見出しのもと、「このような、東西からの人や文化の西日本への流入には、縄文時代後期から晩期までの間に何度かの波があっただろうが、その中でも以後の日本列島の歴史にもっとも大きな影響を与えたと考えられているのが、約2800～2700年前のこととされる、朝鮮半島南部からの水稻農耕の伝来だ。これをもって弥生時代の始まりとする研究者も少なくない」として、稲作伝来朝鮮半島単系説である。

池橋宏『稲作渡来民 「日本人」成立の謎に迫る』(2008)

前著を踏まえて江南系稲作民の日本に至る経緯を追ったもので、紙数の関係で簡潔な紹介にとどめるが、沿海国家で水上戦にも長けた呉越の稲作民の動向を文献史料から丹念に追って呉越から山東半島を経て朝鮮半島に渡り、南下して北部九州に渡ってきたとして、Aルート経由の朝鮮半島からの単系説である。

白石太一郎『倭国の形成と展開』(2006)

白石氏は「現在確認されている日本列島最古の水田は、佐賀県唐津市菜畑遺跡のものである。それは水路や井関を伴う本格的なものであり、そこには木製の農

耕具や脱穀具、それらを製作するのに欠かせない新しい大陸系の磨製石器や穂摘具である石包丁などが出揃っている。それはかつて論じられたように「原始農耕」などというものではない。すでに無文土器文化段階の朝鮮半島南部で水田稲作のシステムとして完成されていたものが、システムとして日本列島にもたらされたものにほかならない。この新しい水田稲作は、北部九州から西日本各地、さらに東日本各地に伝播し、やがて新しい弥生文化を日本列島に成立させる」として、Aルートによる稲作伝来朝鮮半島単系説である。

安田喜憲『稲作漁撈文明』(2009)

安田『稲作漁撈文明－長江文明から弥生文化へ－』は日本列島への稲作の伝播の証拠はプラント・オパール分析やDNA解析によって新たな段階へと発展したとして、先に見た佐藤洋一郎『稲の日本史』(2002)にもとづいて①縄文後期の4000年前に台湾・沖縄を経て南九州に到達する「海上の道」ルートで熱帯ジャポニカが伝来、その後②縄文晩期の3000年前に山東半島から朝鮮半島経由のAルートで温帯ジャポニカのSSR型a型が伝来、さらに③Bルートで江南地方から直接九州に温帯ジャポニカのSSR型b型が伝来した、とした。つまりA・B・C3ルートでの稲作伝来の3段階・3系統説となるが、熱帯ジャポニカについては本格的な稲作とは結びつかないというのが大方の一致のようなので、Cルートを外せば2段階・2系統説となる。

石川日出志『農耕社会の成立』(2010)

石川『農耕社会の成立』(シリーズ日本古代史①2010)は、「稲作伝来ルート」の小見出しのもと、A南西諸島経由、B直接渡海ルート、C山東半島～朝鮮半島経由、D山東半島～遼東半島～朝鮮半島経由、E中国東北部～朝鮮半島経由、の五つのルート案が出されていると図示した上でAの「海上の道」ルートは沖縄本島での稲作開始は10世紀をさかのぼらないと否定、Bの直接渡海ルート案を採る考古学者もいるが高床倉庫以外に長江以南と弥生文化を結びつける資料・データはなく支持者は少ないと樋口説を否定、北

回りの E 案は具体的な稲作関係資料の裏づけがないと否定して C 案か D 案が妥当とする。本稿の A ルートの朝鮮半島經由単系説である。

藤尾慎一郎『〈新〉弥生時代』(2011)

藤尾『〈新〉弥生時代 五〇〇年早かった水田稲作』(2011) は、AMS 年代法を解説しながらそれにもとづいて新たな弥生時代像を描き出したものだが、「図 28 水田稲作の拡散ルートと開始年代」では前 5000 年に中国江南地方河姆渡遺跡を出た稲作が北上して前 11 ～ 10 世紀に山東半島へ、そこから朝鮮半島に渡って南下し、前 10 ～ 9 世紀に朝鮮半島南西部から北部九州に伝わり、その後列島各地に拡散していく様子が示されていて、稲作伝来朝鮮半島単系説である。

設楽博己「縄文時代から弥生時代へ」(2013)

設楽氏は宮本(2009)の朝鮮半島農耕化の四段階説に拠って、①中国古代には黄河流域の華北型農耕：アワ、キビの雑穀栽培にブタ、イヌ、ウシを飼い狩猟もする華北型農耕と、長江流域で水稻栽培とブタ飼育、淡水魚漁撈に特化した華中型農耕があるが、②稲作は遼東半島から紀元前 3000 年紀後半に朝鮮半島中南部に達してアワ・キビ農耕と複合して華北・華中コンプレックスが生まれ、紀元前 8 世紀にその穀物栽培コンプレックスが日本列島に伝来した、とする。つまり山東半島・朝鮮半島で華北の畠作農業と融合した畠作化した稲作が A ルートで北部九州に伝えられたことになる。

先行研究概観のまとめ

以上の各氏の論考を振り返ってみれば、稲作民来住を朝鮮半島からと中国江南地方からの 2 系統と見る説は樋口隆康(1971)、佐原眞(1987)、寺沢薫(2000)と繰り返し主張されており、若林弘子(1998)の玄関で履物を脱いで屋内では跣足の畳生活という日本の低床式住居は河姆渡遺跡以来の長江流域の高床式住居の系譜を引く後裔であることが立証されたことや、佐藤洋一郎(2002)の日本の稲の遺伝子の a タイプは朝鮮半島から、b タイプは直接中国から来たという指摘で、現時点では稲作伝来の朝鮮半島・中国江南地方

からの 2 系統説はほぼ確定したと言い切れる状況だと思うのだが、なお考古学の主流学説は稲作伝来朝鮮半島単系説である。それはなぜなのか。

石川日出志(2010)は「かつて、弥生時代は、日本列島に初めて稲作が導入されたのだから、水田立地も、水利も、稲作も、原初的な技術段階にあると考えられていた。当然、田植えなどは行なわれず、より素朴な播種によると思われていた。ところが、岡山県百聞川原尾島遺跡の弥生後期の水田では、水田面に深さ数 cm で直径 10 cm に満たない無数の窪みがみつかった。その窪み群は 1 m ほどの幅の中に約 12 個が緩やかな弧状に並ぶ。これは稲株跡で、それが弧状をなして幅 1 m に並ぶのは、稲株上で左右に動いた片腕の軌跡を示す。つまり田植えが行なわれたことの証拠である。(中略)弥生時代の当初から田植えが行なわれた可能性はある」とした上で、稲作伝来朝鮮半島単系説を採っていることからすれば、朝鮮半島で田植えが行われていたという認識であり、「田植え法が江南系稲作のメルクマールとなる特徴で、朝鮮半島の稲作は田植えを欠いた直播法だった」という事実が考古学者の間では共有されていないことに原因があることが見えてきた。

そこで次章でまず宮嶋博史氏の研究にもとづいて朝鮮半島の田植えなし直播法(乾畚直播法)とはどんなものかを確認して共有財産とした上で、3 章以下では朝鮮系稲作民の持ち込んだ乾畚直播法の普及の上に江南系稲作民の田植え法の波を被って変容する各地の様子を復原することにした。

Ⅱ．朝鮮半島の田植えなし「乾畚直播法」

前近代の朝鮮半島稲作について論じた宮嶋博史「朝鮮半島の稲作展開—農書資料を中心に—」(1987)は、朝鮮半島独特の直播法が紹介されていて、日本列島への稲作伝来を考える上での重要な論考である。また宮嶋『両班 李朝社会の特権階級』(1995)にも解説があるので、両者を参照しながら紹介しておきたい。

Ⅱ-1 宮嶋博史による李朝の「乾耕法」

15 世紀の旱田・水田比率 表1は宮嶋(1987)の表1



表 1 15 世紀李朝の
旱田／水田比

地 域	旱田 (畑)	水田 %
忠清北道	68.6	31.4
忠清南道	54.2	45.8
全羅北道	51.3	48.6
全羅南道	55.6	44.4
慶尚北道	64.0	36.0
慶尚南道	56.1	43.9
平 均	58.3	41.7

『世宗実録』地理志による
(宮嶋博史1987、表1を加工)

を加工したもので、朝鮮半島中南部の6道の旱田（畑）と水田の比率の一覧表で、旱田比率が一番高いのは忠清北道で68.6%、低いのは全羅北道の51.3%でこれでも半分以上、6道平均では旱田58.3%に対して水田は41.7%で、旱田が約6割を占めていて、田植えをやらないう旱田が優勢だったことを示している。

中国では「田」とはハタケを表す漢字で（木村茂光1996）、唐の均田制も畝制度の規定であり、田んぼは「水田」と表現した。ところが日本に漢字文化を導入した百済系文官（中身は中国語を話す中国人）は日本の主要耕地に「田」の字を当てたため、日本では田は田んぼを表すようになり、ハタケを表すため新たに「畝」や「畑」といった「国字」を創作した。朝鮮半島は中国文化を素直に受け容れたため「田」は原義通りにハタケであり、水田を表すため水田を上下に積んで圧縮して一字とした「沓」（通音トウ）という朝鮮独自の漢字を作った。

在地両班層と李朝農業の発展 宮嶋氏によれば、在地両班層が形成されてくる李朝前期は、朝鮮の歴史上でも農業の生産力が目覚ましく発展した時期で、農業の発展が在地両班層成長の大きな原動力になったと同時に、在地両班層は農業技術の発展や農地の開発にも積極的に

関わっていった。その動きがこの時期にはじめて朝鮮独自の農書を生み出すことにつながった。高麗時代から『齊民要術』や『農桑輯要』など中国の農書が輸入され参照されていたが、朝鮮半島の風土には合っていなかった。そこで現れたのが朝鮮文字=ハングルの制定で知られる李朝第四代の世宗の命によって作られた『農事直説』（1430）で、州県の老農に各地で実行されている農法を尋ね聞き、それを上申する形でまとめたもので、内容は10編から成り、種子の準備と土地の耕起法を述べた2編のほかは、麻・稻・黍・粟・稗・大豆・小豆・大麦・小麦・蕎麦など12種類の作物ごとに栽培法を述べていて、以後長く朝鮮農書の古典として尊重され続けた。

15世紀朝鮮半島の3種の稲作法 本稿に関係する稲作については「水耕法」「乾耕法」「苗種法」という3種類の栽培法が述べられており、水耕法・乾耕法は田植えを行わない直播法で、苗種法が田植え法である。3種の中では水耕法についての記述がもっとも詳しく、当時の稲作が水耕法を中心に営まれていたことを示している。

水耕法とは、水田に種籾を直播きし、土で覆ったのを灌水する方法で、水田直播法である。苗が成長するまで数回、排水と灌水をくり返し、排水するごとに除草作業を

行う。稲は移植せずに、そのまま収穫期まで本田で育てる。

乾耕法は乾田の状態で播種してその後も畑状態で成長させ、雨期の雨が降れば灌水してその後は水田で育てる乾田直播法で、水の確保が困難で水利条件の悪い水田に適した稲作法であり、朝鮮でのみ広く行われた独特の技術である。

苗種法はいわゆる田植え法だが、『直説』ではこの苗種法は除草には便利だが、万一ひどい日照りの年であれば農家にとって危険きわまりない栽培法として強く忌避されている。

『直説』が苗種法を避けるように勧めているのは、朝鮮半島では日本や中国南部地方に比べて梅雨の雨期が1カ月ほど遅く、田植期に雨が降らないため、苗種法は水利条件のよい水田を除いては、きわめて危険な農法とされたわけで、15世紀前半において水田比率の比較的高かった忠南・全北・全南の各道でも、苗種法（田植え法）はほとんど行われていなかったという。

『農事直説』の乾耕法 この3種の稲作法の中で朝鮮半島独特の乾耕法が弥生時代に朝鮮系稲作民によって日本列島に持ち込まれたと考えられるので、その農法を『農事直説』によって詳しく見ておこう。

春に早続きで水耕法を行うことができないときには、乾耕法を行うとよい〔ただし晩稲しかつくってはいけない〕。その方法。耕し終わると、樁木〔郷名はコンベ〕で土の塊を砕き、さらに木斫を縦横にかけて土を平らにし、熟土としてから、種粃一斗に熟糞または尿灰を一石の割合で混ぜて播種する〔尿灰の作り方。牛小屋の外に池を作って尿を貯めておく。穀物の糠・粃の類を焼いて灰とし、施肥に際して池に貯めた尿とよく混ぜ合わす〕。播種は足種法で行い、播種の後、鳥追いをする〔鳥追いは苗が生ずるまで行う〕。苗が成長しないうちは、水を入れてはならない。雑草が生じたら、早のためにたとえ苗が枯れようと、鋤（ホミと呼ぶ除草具）の作業をやめてはならない。

「乾耕法」を「乾畚直播法」に この乾耕法は朝鮮半島独特の農法で日本の稲作を考える上でも重要なものだが、『農事直説』の「乾耕法」という用語では、朝鮮半島独自という意味合いと「直播」という言葉が盛

り込まれていないので、朝鮮半島独自の耕地名「乾畚」の「直播」を加えた「乾畚直播法」と呼ぶことにし、日本列島への稲作伝来については、

稲作伝来第1波：朝鮮半島から稲作民が来住して乾畚直播法を持ち込んだ

稲作伝来第2波：江南地方から稲作民が来住して田植え法を持ち込んだ

とまとめることにしたい。

ではこの朝鮮半島の乾畚直播法の理解を深めるために、冬～春の低温・乾燥気候が一層厳しい条件下での「これぞ乾地農法」ともいうべき平安南道の二頭引き犁を使った乾畚法を見ておくことにしたい。

平安南道の二頭引き犁を使った大規模乾畚法 これまで見てきた『農事直説』の乾畚直播法は牛犁を使わない京畿道辺りの乾畚法で弥生時代に日本列島に持ち込まれたと考えられるタイプだが、李春寧『李朝農業技術史』（1989）によれば、平安南北道および黄海道の一部に発達した乾畚法は乾地農法（dryfarming）のよい一例であり、乾稲直播法でもあって、世界の米作中の特異な存在とされている。古代以来、北中国の農法の輸入は活発であったが、気候（雨量については夏雨型）の類似性と同時に北中国の乾地農法が朝鮮半島の西北部に濃厚な影響を与え、このような独特の稲作法を生み出したものと見ることができる。乾畚の面積は平安南道で1926年に32729町歩、1937年に22522町歩で、現在では多少それよりも減少しているとみられる、として朝鮮総督府の勸業模範場『平安南道に於ける乾畚』（1928）を引用している。日本に持ち込まれた人耕乾畚法とは違って二頭引き犁と使った大規模なもので、タイプは異なるが、朝鮮半島中・北部での稲作法がどんなものか知るために見ておこう。

この乾畚法は、稲を灌漑設備のない乾地に播種して畑作物のように育成するが、雨期（七月中、下旬）に入って雨水を入れ、以後は一般の水稲と同じようにとりあつかう。したがって、この耕作法の重点は、降雨を待っている間の前半期にあり、乾燥期の培土管理のやり方で耕起、整地、作畝、鎮圧、培土、中耕などに格別の努力を必要とする。ヨンジャン（二頭引き犁）で耕起した後、ピョンフチ（一頭引き犁）で作畦して播溝をつくり、そこに播種をし

て施肥する。これが終われば、メフジ（一頭引き犁）で畦間の土をけずって播溝に覆土してから、サルボンジ（木製の攪土器で歯が三つあり、牛で曳く）を使って覆土した上を砕土、攪擾して均平する。次にまた、その上をメボンジ（木製で木刃があり牛で曳く）をつかって砕土と鎮圧の作業を行う。

この攪擾と鎮圧は四～五日のあいだに二～三回（乾燥がはなはだしければ四～五回）繰り返す行いが、この作業は、土壌の表面からの水分の蒸発を防ぎ、地下水の上昇を促し、播種の部位に水分を保有させるための緻密な措置である。播種後二～三週間が経過して芽が出たならば、播条の上にミルボンジを牛に曳かせて団結した表土をやわらかにし、発芽が均一になるように促す。その後は、ときどき、ホミを用いて除草と培土を行い、パルボンジとトンボンジを用いて土塊を砕き、雨期がくるときまで稲の育成を行う。

このように、独特ないろいろの農具を活用した集約的な作業で、乾地を利用しながら、雨期が到来するときまで、稲苗の育成に力を集中するのが、乾畝法の要諦である。乾畝で栽培される稲の品種は、耐旱、耐水の両方の性質をもっていることはもちろんであるが、多くのばあい、その中でも牟租、竜川租、丙租、京租などが重要なものである。

というもので、朝鮮半島中・北部の気候の厳しさと、日本列島が稲作には恵まれた気象条件にあることを、あらためて知る思いである。

ところでこの二頭引き犁を使った平安南道の稲作は『農事直説』の人が耕す乾畝直播法とはまったく異質なもののなので、『農事直説』の乾畝直播法を「人耕乾畝直播法」、平安南道の二頭引き犁を使った乾畝直播法を「牛耕乾畝直播法」と名づけて区別することにしよう。人耕乾畝直播法が山東半島→遼東半島→朝鮮半島西岸地帯を通して西南部に定着、やがて北部九州に伝わるのに対して、牛耕乾畝直播法は華北でアワ・キビの畑作を二頭引き犁を使って乾地農法を行っていた漢族がイネの伝播を承けて彼らのアワ・キビの牛耕乾地農法をイネに応用して寒冷・少雨地帯での稲作を実現したもので、こちらは朝鮮半島北部に伝わって高句麗の経済基盤の強化に寄与したのであろう。このよ

うに乾畝直播法とはいっても人耕乾畝直播法と牛耕乾畝直播法は耕作法も歴史も系譜もまったく異なるものであることを確認しておきたい。

Ⅱ-2 人耕乾畝直播法の始まりはいつか

人耕乾畝直播法は本来稲作の適地ではない東アジア北部のアワ・キビの畑作地帯に適応した稲作であり、田植え法が南の照葉樹林地帯の稲作とするなら、乾畝直播法はナラ林文化地帯に適応した稲作だったことになる。ならばその起源は田植え法の江南地方人が北のアワ・キビの畑作地帯と南の稲作地帯の境界線である秦嶺－淮河線を越えて北側に移住した際に開発した農法だったことになろう。この江南地方人の代表格は呉越の人たちであり、彼らは戦国時代にたびたび山東半島に進出している。この点は池橋（2008）も「山東半島は、長江下流域の稲作地帯から朝鮮半島や日本列島への「回廊」の位置にあるから、山東半島へ進出した呉・越の動向は、水田農耕の拡大という見地からも注目される。また、山東半島の歴史の中に、呉や越の進出の跡を物語るものがあるかどうか注目しなければならない。それとともに山東半島の自然地理学的条件も理解しておく必要がある」と指摘している。そこで呉越の山東半島進出の様子を池橋（2008）から抽出してまとめたのが表2の「呉越の山東半島進出と興亡年表」である。

この年表で見れば、紀元前473年に呉が越に滅ばされた際、図2の地図で見ると呉は越の北側に位置するので、南の越から攻められた呉の難民の多くは

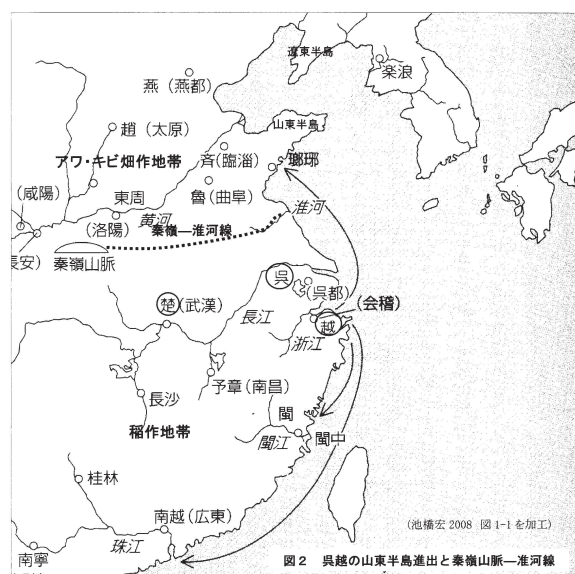
表2 呉越の山東半島進出と興亡年表

前496	呉王の闔廬、銭塘江の戦いで越に敗れて死ぬ
前494	呉王夫差は会稽山のふもとで越王勾践を負かす
前492	勾践は夫差に屈辱的な条件で降伏し、報復を誓う
	呉王夫差は霸王となる
前473	呉王夫差が北征した隙に 越王勾践は蘇州を攻撃、呉は滅亡
前468	越王勾践は山東半島の瑯琊に都を移し、中原に覇をと なえた
前334	越が楚に撃たれて敗亡、越人は船に乗って四散

池橋宏『稲作渡来民』（2008）にもとづいて作表

船で北に逃れ、山東半島に行き着くであろう。また呉に勝った越王勾践は紀元前 468 年には山東半島の琅琊に都を移し、ここを拠点に中原に覇をとなえたという。

ところが呉越の民が山東半島に進出したということは、先に述べたように秦嶺—淮河線を越えての華北のアワ・キビの畑作地帯への進出であり、予想しなかった少雨で雨期の遅れる気象条件に戸惑いながらの生活を強いられることになる。この状況を気象データで確認するために作成したのが表 3 で、『理科年表 1996』から華北の北京・天津、遼東半島の大連、山東半島の青島、華中の上海と華南の広州、それに台湾の台北と韓国では仁川・木浦、それに日本の奈良・大阪・福岡の月別平均降水量表を作成し、150mm を越える月を雨期として彩色し、30mm 未満の月を少雨期として太線枠で囲って示した。また表 4 には中・韓・日の主要 7 地点の月別平均気温を掲げた。



奈良・大阪と仁川の気象条件の違い そこで表 3 でヤマト政権の本拠地で古くから田植え法稲作が行われていた奈良・大阪と、かつて乾畚直播法が行われていた韓国の仁川の別平均降水量を見ていくと、奈良・大阪では本田の春田打ち苗代を準備して苗を育てる 4～5 月（旧暦では 3～4 月）には、ほぼ 130mm 前後の雨があり、水不足の心配もなく稲作の準備ができる。ところが韓国の仁川では 4 月・5 月は 81.1mm・85.1mm と日本に比べて少なく、その前の 12 月～2 月は 20mm を少し超えただけの極少雨期で地面は乾燥しきっており、そのためわずかな雨でも降れば、広い耕地を即刻

浅く耕起して鎮圧し、表土の毛細管現象を断ち切って地中の水分が蒸散しないように努めて種が芽吹くための水分確保に腐心するというドライファーマーミングを行わなければならない。

次いで雨期の始まりについて見ると、奈良・大阪では 6 月すなわち旧暦 5 月に梅雨が始まり、これが田植えの適期で「五月雨の降る五月に五月女が田植えをする」という伝統的な田植えの季節となっている。ところが韓国の仁川では雨期の始まりは 7 月でちょうど日本とは 1 カ月遅れであり、雨期を待っているのは苗が伸びすぎるので、まだ灌水していない畑状態の本田に穴をあけて、肥料をまぶした種籾を蒔いて穴を塞ぎ、畑（乾畚）状態で苗を育てて雨期がくれば灌水してその後は水田として育てるという乾畚直播法となる。以上をまとめれば、①冬から春の少雨・乾燥気候と、②雨期の 1 カ月遅れの 2 点が、秦嶺—淮河線以北のアワ・キビ畑作地帯で稲作を行う際の大きな障碍だったことになる。

ただ②の雨期の 1 カ月遅れについては、晩稲系品種で対応すればいいし、実際にもそうされているようなので、逃げ道はある。となれば、①の冬から春の少雨・乾燥気候が、秦嶺—淮河線以北で稲作を行う際の最大の障碍だったことになる。

山東半島も春の少雨と雨期の遅れ そこで表 3 に戻って越王勾践が進出した山東半島琅琊に近い青島の別平均降水量を見ると、前年の 11 月から年明けの 3 月までの 5 カ月間は平均 16.3mm という極少雨期で、まさにドライファーマーミング対応をしなければならない環境であり、雨期が来るのも稲作適期から 1 カ月遅れの 7 月であるという、まさに乾畚直播法でしか稲作はできない環境だったことが分かる。山東半島琅琊に進出した越人たちはその対応を迫られたわけだが、越王勾践は琅琊を拠点に一時的にせよ中原に覇をとなえたということは、彼らは山東半島に定着して生活の安定を確保していたようであり、試行錯誤の繰り返しの中から原初的な乾畚直播法の開発に成功していたと見られる。

そしてこの段階で田植え法は姿を消したことも確認しておきたい。田植え法は秦嶺—淮河線以南の照葉樹林地帯での農法であり、秦嶺—淮河線以北では通用

表3 中・韓・日の月別平均降水量と雨期・少雨期

国立天文台編『理科年表 1996』

地方	北緯	都市	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年間
華北	39.56	北京	2.7	5.9	9.1	26.5	28.8	70.8	175.7	182.1	48.8	19.0	6.2	2.3	577.9
	39.06	天津	7.9	16.8	15.6	23.8	36.1	62.0	199.0	175.6	46.7	32.5	18.9	9.2	644.1
遼東	38.54	大連	9.2	7.6	13.2	35.0	43.8	81.9	173.4	151.0	63.6	28.3	20.3	11.2	638.5
山東	36.04	青島	10.6	12.3	20.7	37.5	51.4	80.9	211.4	164.3	96.4	45.1	28.1	9.8	768.5
華中	31.10	上海	39.4	59.0	81.9	102.4	106.3	152.2	127.9	133.1	155.5	63.3	53.7	35.1	1109.8
華南	23.08	広州	43.4	65.0	83.1	182.0	283.7	257.8	227.6	223.8	171.6	79.5	43.3	23.5	1684.3
台湾	25.02	台北	88.3	154.1	188.7	123.3	209.3	276.8	231.6	236.9	388.9	113.7	79.4	70.3	2161.3
韓国	37.29	仁川	21.7	23.4	39.1	81.1	85.1	93.7	282.4	250.7	148.1	38.9	51.1	20.3	1135.6
	34.47	木浦	35.4	44.9	55.0	95.6	90.9	163.1	213.5	155.1	130.0	45.9	51.7	26.4	1107.5
日本	34.41	奈良	49.2	62.3	99.4	125.2	127.3	212.3	185.8	114.8	161.7	109.7	66.6	40.4	1354.7
	34.41	大阪	45.8	60.4	102.0	133.8	139.4	206.4	156.9	94.8	171.5	107.5	65.1	34.4	1318.0
	33.35	福岡	73.7	70.0	98.4	126.5	144.1	256.2	257.6	165.9	175.2	96.0	80.0	60.7	1604.3

 は降水量150mm超の月

 は降水量30mm未満の月

表4 中・韓・日の月別平均気温

国立天文台編『理科年表 1996』

国	北緯	都市	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	平均
中国	36.04	青島	-1.4	0.0	4.9	10.7	16.3	20.3	24.4	25.3	21.1	15.5	8.3	1.5	12.2
	31.10	上海	3.7	4.4	8.5	14.2	19.2	23.4	27.8	27.7	23.6	18.3	12.3	6.1	15.8
韓国	37.29	仁川	-3.0	-1.4	3.9	10.4	15.8	20.0	23.7	24.8	20.5	14.6	7.0	0.1	11.4
	34.47	木浦	1.3	2.4	5.9	12.0	17.0	20.9	24.7	26.1	22.0	16.4	10.1	4.5	13.6
日本	34.41	奈良	3.4	3.7	6.8	13.1	17.7	21.5	25.5	26.4	22.2	15.9	10.6	5.7	14.4
	34.41	大阪	5.5	5.8	8.6	14.6	19.2	23.0	27.0	28.2	24.2	18.3	12.9	7.9	16.3
	33.35	福岡	5.8	6.4	9.5	14.6	18.8	22.3	26.9	27.6	23.7	18.2	13.0	8.2	16.3

しないのである。

その後、越の都は会稽に戻ったようだが、前334年には越は楚に討たれて滅亡する。楚は琅琊を奪い山東半島に勢力を伸ばしたので、琅琊の越人たちは乾菰直播法を携えて遼東半島に逃れ、さらには朝鮮半島北西部に入り、子孫たちはその地の気候状況に対応して改良を加えつつ西岸部を南下して、李朝15世紀『農事直説』の乾耕法（乾菰直播法）に繋がったと考えられる。

II-3 李朝の苗種法（田植え法）の開発はいつか

李朝時代には乾菰直播法（乾耕法）のほかに苗種法（田植え法）もあったが、その成立はいつか。先に見たように朝鮮半島の苗種法は李朝初期の『農事直説』では田植え期に雨が降らなければ収穫ゼロにおちいる危険性が高いと制止の対象になっていたが、その後時代を追って拡大していくと宮嶋氏は述べる。この歴史

を逆にさかのぼれば苗種法の出現は李朝の一つ前の高麗時代と考えてほぼ間違いないだろう。

ここで重要なことを挙げておくと、江南地方の越人たちの間で生まれた田植え法は、本田準備の田起こし・灌水・畦塗り・荒代掻き・中代掻き・植代掻き・エブリでの代均しと、苗代作り・種籾浸し（籾漬け）から苗代作り・鳥追い・苗取り・苗運び・田植え、と一連の技術体系をなしているので、田植え場面だけを傍から眺めているだけでは技術は伝わらず、田植え稲作民の朝鮮半島への来住が必須の条件となる。

そこで高麗時代に稲作民が朝鮮半島に来住した可能性を歴史の中から探れば、唯一の可能性として浮上してきたのが対馬・壱岐・肥前松浦地方の住民からなる倭寇勢力の朝鮮半島沿岸攻撃であり、さらに過激化しての内陸攻撃である。

田植え法を持ち込んだのは倭寇か 倭寇は14～15世紀、高麗後期～李朝初期の前期倭寇と、16世紀、李

朝時代の後期倭寇に分けられるが(田中健夫「倭寇」)、田植え法は高麗時代に伝わっていることからして前期倭寇に絞られる。倭寇は当初は高麗側から「三島の倭寇」と呼ばれたように耕地の少ない対馬・壱岐・肥前松浦地方の住民が半島南部の海岸地方を襲った海賊行為であったが、やがて高麗の貧民や賤民も加わって大規模化し、内陸部も襲うようになった。この混乱の中で対馬・壱岐・肥前松浦地方の住民の一部が仲間の高麗人とともに朝鮮半島に住みついてしまう可能性は十分にあるといえよう。倭寇の海賊は男集団であり、故郷に居場所がなかった者や身の自由な若者は海賊生活から足を洗って定住し、現地妻を娶って農民化する者も現れたであろう。

朝鮮半島は南部ほど田植え法適地 ここで表3の韓国欄から朝鮮半島最南端の木浦の気象条件を見ておこう。朝鮮半島南部は西側が南に伸びて、南部の海岸線は東高南低の斜め線になっているが、木浦は南に突き出た海岸線の西端、つまり南西端で朝鮮半島のもっとも南にあり、その緯度は北緯34度47分で奈良・大阪とほぼ同緯度である。

田植えの可否の決め手となる降水量を見れば、苗代作りの5月は90.9mmで十分で、田植えの6月は163.1mmで日本並みに6月に雨期が始まっている。そして表4で気温について見ても真冬の1月でも1.3度と氷点下の月はなく、5月、6月は17.0度、20.9度と暖かくて、田植えの適地であることが確認できる。

対馬・壱岐・肥前松浦地方の住民の一部が倭寇となって朝鮮半島を襲い、そのいくらかが朝鮮半島に住みついて住民化するとするなら、その定住者の分布は日本に近い南部の方が密になると見るのが自然であろう。そこは気温も温暖で雨期も6月に始まって、まさに田植え法の適地であり、ここが倭寇の移住による朝鮮半島での田植え法＝苗種法の発祥地と見るのが妥当であろう。そしてその時期は倭寇集団が高麗の貧民や選民も加わって大規模化し、内陸部も襲うようになった高麗時代後期の1350年代前後に絞り込むことができよう。紀元前468年、越人が秦嶺―淮河線を越えて山東半島に進出し、田植え法が消えた時から約1800年ほど後に、朝鮮半島南部への三島倭人の定住によって田植え法が復活したことになる。ただこの朝鮮半島

での田植え法の誕生は日本では南北朝時代なので、日本への稲作伝来とはまったく関係ない。

Ⅱ-4 朝鮮半島経由では弥生時代に田植え法は伝わらない

以上、やや丁寧に朝鮮半島の乾耕法(乾畚直播法)や苗種法(田植え法)の成立経緯を見てきたが、この結果からすれば、図1で見た日本列島への稲作伝来3ルート、すなわち

Aの江南地方→山東半島→(遼東半島)→朝鮮半島西岸部→北九州の北回りルート

Bの中国江南地方から直接九州にわたってくるルート

Cの江南地方→台湾→南西諸島→南九州の「海上の道」ルート

のうち、考古学界の通説で教科書でも採用され、イネ研究者の多くも支持するAの北回りルートは、秦嶺―淮河線を越えて北側の少雨・乾燥・雨期遅れ地帯を長く経由するため、その間に田植え法は消えてしまうので、このルートでは日本列島に田植え法は伝わらないことになり、日本列島への稲作伝来をAルートに絞り込んでしまえば、田植えを主体とする日本の稲作起源が説明できないのである。

田植え法を日本列島に持ち込むには、秦嶺―淮河線を越えないルートが求められるが、Cの海上の道ルートでは沖縄の稲作遺跡は10世紀を遡らないという考古研究者の意見を尊重するなら、江南地方から東シナ海を渡って直接九州に渡ってくるBルートしか残らない。ただこの東シナ海横断ルートは遣唐使船もたびたび遭難しているとか、実験航行の結果、羅針盤のない時代に横断は無理だなど、それぞれ根拠のある反論はなされているが、本稿で後に確認するように田植え法稲作は畿内を基点に広がってヤマト政権や律令国家を支える基幹産業にまでなっていることからして、江南系稲作民は研究者たちの心配を尻目に確実に渡ってきているのである。

江南系稲作民が現実に渡ってきていたのなら、その痕跡が何かあって然るべきだが、それがまったく無いとされてきたのは『古事記』『日本書紀』は編纂当時の政府の都合で創作された話が多くて信頼できない」

とする研究者の「史料批判」によって記紀に記された神武東征伝承が研究対象から外されてきたため、研究者たちの史料に対するやや傲慢な「史料批判」を改めて『古事記』『日本書紀』の記事を尊重し、神武東征伝承から神話として付加されたことが明らかな部分を取り除いて読めば、ニニギノミコトに率いられた江南系稲作民の難民大集団が南九州薩摩半島の笠沙の野間岬に上陸、南九州に一時滞在したのち神武天皇に率いられて九州東岸から瀬戸内海を通過して大阪湾に上陸、長髓彦軍に撃退されて撤退した後、あらためて宇陀から奈良盆地に打って出て諸勢力を次々と打ち破り、激戦の末、長髓彦軍を破って橿原で即位した、という部分は事実の反映であり、それに神話脚色を加えて記録されたのが記紀の神武東征伝承と解すれば辻褄が合う。ただこの点の考証には紙数を要するので、序文に述べた通り後編に譲ることにする。

Ⅲ. 列島各地の稲作法の分布状況

Ⅲ-1 大和・河内地方では田植え法が席捲して乾畚直播法を駆逐

政権中枢部の大和・河内地方の場合、先に来住した朝鮮系稲作民が乾畚直播法をやっていたところに、江南系稲作民が割り込んできて、華やかな畦田方式の田植えを始めた。

田植え法は除草が楽で収穫量大 朝鮮系の乾畚直播法と江南系の田植え法を比べれば、乾畚直播法は本田で苗から育てるのでイヌビエなど雑草との競合が激しく、雑草は生命力が強いので草取りが大変なのに対して、田植え法の場合は①何も生えていない本田にいきなり伸びたイネを植え付けて、スタート時点で雑草と大きな差を付けようという工夫であり、一番草・二番草・三番草と最低3度は行う草取りはたしかに大変だが、直播法に比べればかなり楽である。②それに日本の田植え法は気象条件に恵まれて収穫も多い。③日本の恵まれた気象条件の下では家族ごとの小経営が成り立ち、その家族が何枚かの田をわが田として労力を惜しまず丁寧に管理するので自ずと収穫も多くなり、それが努力への報酬となって自発的・意欲的に働くので、

それがまた高収穫を生むというプラスのスパイラル構造になっている。

それに対して華北系のアワ・キビの畑作は単位面積当たりの収穫量が少ないため、耕作面積が大きくなり、二頭引き犁や地理碎土具など大きな資本が必要となって領主と農民、経営者と農業労働者という上下関係の組織ができて、現場の農民は与えられたノルマをこなすために働くという意欲の湧かない仕組みとなっている。日本に持ち込まれた京畿道の乾畚直播法は二頭引き犁を使うような大規模農業ではないが、収穫量の少なさは端境期の食糧難が厳しく在地豪族の保護に頼らざるをえなくなって豪族経営の下で働くことになって、農作業は生き甲斐よりは苦しさ为先立って収穫量もあまり上がらない、という負のスパイラル構造に陥っている。

この違いを心に留めて、まず政権中枢部の畿内地方での田植え法の広がり状況を見ていくことにしよう。

ヒトは「文化的動物」 田植え法の急速な広がりを考えるとき、“ヒトは「文化的動物」”というキーワードで考える必要があるのではないかと常々思っている。この際披露して皆さんのご意見を伺いたい。直立歩行で重い脳も身体を中心軸で受けて大地に伝えることで重さの上限が解放され、本来衣食住の確保、とりわけ食の確保の工夫のために大きくなり始めた脳は必要量を超えて大きくなりすぎて、余分なことを考えるようになった。そこで生まれたのが「恰好いい」という価値観や他人に良く見られたいという「見栄」、あるいは先進文化を眩しく受け止めて強く憧れるなど、実用とは少し外れた文化的・精神的価値観が人を行動に駆り立てる要因になっていることで、これがヒトの歴史を考える中で、無視できない比重を持っているように思える。

江南系稲作民の持ち込んだ田植え法が朝鮮系稲作民が行っていた乾畚直播法に比べて優れている点は、①雑草の種もない真っさらの水田にすでに伸びた苗を移植することで、雑草とスタートラインで差を付けて草取りを楽にすることや、②精緻な水加減の調整など労を惜しまぬ緻密な管理の結果として高い収穫をあげること、③田楽を伴った華やかな早乙女田植えの文化的魅力の三つが考えられるが、①の草取りの楽さや②

の収穫量の多さは、田植え法を導入し実践してみて初めて実感できるものであって、田植え法導入以前に「田植え法をやりたい」という気にさせる動機といえば、③の田楽を伴った華やかな早乙女田植えの文化的魅力となろう。風に乗って流れてくる賑やかな田楽囃子や指揮者と早乙女合唱の掛け合いの田植え歌に好奇心を刺激され、わが村の作業もほどほど畦に並んだ見物人に加わってその文化的魅力にハートをわしづかみにされ、居合わせた同村の女性同士でわが村でもやりたいと盛り上がり、村に帰ってその方針を決め、秋の稲刈りには村で都合して何人かの男女を手伝いとして江南系稲作民村に送り込み、その縁で有力農家に年明けから何人かの男女を無給の住み込み手伝いとして送り込んで男は春の田起こしから種粃浸し・苗代作り、女は田植え歌と田植え法を学んで結の一員に加えてもらって習熟し、その彼や彼女らを核に自村での田植え法導入を成功させた、と考えられる。

畿内地域は田植え法拡大の条件が揃った地 この接触感染のような方式で田植え法が広がるとするなら、発信元の江南系稲作民が大集団で集住する政権中枢部の大和・河内地方やその周辺の畿内地方では田植え法は急速に広まり、その逆に江南系稲作民の大きな集住地のない地方では田植え法が広がらず、乾畚直播法が後の時代まで残ることが考えられる。では実際にはどうか、見ていくことにしよう。

大和・河内は田植え法が席捲して乾畚直播法は消滅 政権中枢部だった大和・河内地方の場合は、後に報告するように考古学では弥生土器の型式から大和川系と淀川系が明確に区別できるようで、私は大和川系が江南系稲作民、淀川系が朝鮮系稲作民の棲み分け状況と考えれば辻褄が合うと考えているのだが、大正・昭和期に行われていた田植えでは、大和川系・淀川系といった地域差はまったく見られず大和・河内は全域で早乙女の田植え法一色だったことからすれば、後から来住した江南系稲作民が囃田方式の田植えを始めて間もないころに両者の交流が始まり、文化の香りが高く、草取りが楽でかつ収穫量も多い田植え法が畿内地方を席捲して、朝鮮系稲作民の持ち込んだ乾畚直播法は間もなく姿を消してしまったようである。

京都盆地の田植え法滲透は平安遷都がきっかけか 後

に見るように『栄華物語』『枕草子』など文学作品や『百練抄』『中右記』『長秋記』『玉海』等の記録から、平安時代の京の都では田楽囃子のもと大勢の早乙女による囃田方式の田植え法が盛んに行われ、上皇や女院らがそれを観賞することがしばしば見られたことが確認できるが、では京都盆地の田植え法はいつ広がったのかといえば、そのきっかけは平安遷都であろう。

山背（山城）国は、各地の朝鮮系稲作民勢力が擁立運動を起こして支えた継体天皇の乙訓宮や綴喜宮が置かれたところでもあり、朝鮮系稲作民の集住地なので乾畚直播法が長く行われていたであろう。山背国や京都盆地の住民にとっては河内や飛鳥の宮は遠い存在であり、自分らは田舎者と卑下する気分もあったであろう。ところが784年の長岡京遷都に続いて794年の平安遷都は状況を一変させた。昨日までの片田舎が一夜明ければ首都圏になったのであり、「もうわれわれは田舎者ではない。首都圏の住人なんだ」という高揚感は察するに余りある。この互いに顔を見合わせば笑顔がこぼれる状況下で、貴族らと移住してきた大和の農民たちが田楽囃子と早乙女集団の掛け合い歌に見惚れて、これが首都圏農民の田植えかとその文化の高さに感動し、早速住み込みの見習いを申し込んで自分の村で囃田方式の田植えをすることがブームになって囃田方式の田植え法は京都盆地に急速に滲透し、乾畚直播法は姿を消していったものと思われる。

Ⅲ-2 畿外では乾畚直播法も残存

日本の気候では乾畚直播法である必然性は消滅 先に朝鮮半島の稲作法を検討したおりに、奈良・大阪に比べて仁川は梅雨の雨期が1カ月遅れることに加えて、種粃が芽吹き苗として成長する春の低温と少雨が田植え法を阻んでおり、本田に肥料をまぶして直播し、除草を繰り返しながら雨期がくれば灌水して水田で育てるという乾畚直播法を採らざるをえなかった事情だと説明した。ところがその朝鮮系稲作民が日本列島に渡ってくれば、そこは温暖・多雨の環境にあり、雨期の田植え適期の6月に始まるので、もう乾畚直播法にこだわる必要はなく、明日にでも田植え法に乗り替え可能な気候条件下にあった。ならば朝鮮系稲作民は日本列島来住直後から直ちに田植え法に乗り換えたかと



図３ 関東地方の摘田の分布（小川直之 1995）

いえば、そうではなかったようだ。

乾畚直播法が日本伝来後も残る要因 その要因の第一は、江南系の田植え法は先ほど見たように、本田準備の田起こし・灌水・畦塗り・荒代掻き・中代掻き・植代掻き・エブリでの代均しと、苗代作り・種粃浸し（粃漬け）から苗代作り・鳥追い・苗取り・苗運び・田植え、と一連の技術体系をなしているので、田植え場面だけを傍から眺めているだけでは技術は伝わらず、親や祖父母に叱られながら手伝いを繰り返す中で身につけることで技術継承されるものだったからである。したがって朝鮮系稲作民が田植え法に乗り換えるには、まず江南系稲作民と出会い、彼らに田植え法を学べる環境に置かれることが、まずもって必要である。

第二には、伝統的農村社会の一般的な傾向として、親にたたき込まれ身に染みついた農法は、その地の気候に合わなくて不作に見舞われるといったような刺激がない限り「農業とはこうするものだ」という観念に守られて、代々受け継がれていくものなので、江南系稲作民の田植え法と出逢わないような環境下では、そ

の地の気候・水利条件に合わせて多少の改良を加えながらも、日本来住後も乾畚直播法が唯一の稲作法と信じ込んで代々受け継がれていくことになる。

第三には、田植え法が乾畚直播法に比べて優れている点は、雑草の種もない真っさらの水田にすでに伸びた苗を移植することで、雑草とスタートラインで差を付けて草取りを楽にすることや、精緻な水加減の調整など労を惜しまぬ緻密な管理の結果として高い収穫をあげることだが、その草取りの楽さや収穫量の多さは、田植え法を導入し実践してみても初めて実感できるものであって、田植え法に触れる機会に恵まれない環境の中では、稲作とは先祖代々受け継いできた乾畚直播法だという固定観念からなかなか抜け出せないのである。

では実際にはどうなのか、小川直之氏らの研究によって、関東地方の状況について見てみよう。

Ⅲ-3 関東地方に残っていた乾畚直播法

九州や南関東地方では、ツミタ（摘田）やミマキ（実

播)と呼ぶ田植えなし稲作が行われていたことが民俗学者によって報告されている。これまで日本国内の変った稲作として柳田国男の一国民俗学の枠内で扱われていたが、東アジアの稲作史から見れば、朝鮮系稲作民がかつて関東地方に入植したころの農法の痕跡と考えられるもので、考古学界やイネ学の人たちとの共有財産とすべき貴重な事例なので、やや丁寧に紹介することにしたい。

関東地方の乾耕法=摘田 ここでは関東地方の摘田を小川直之(1986)や大館勝治(1988)によって見ていこう。

小川直之「南関東の水稻直播き(関東地方南部)」(1986)を要約して紹介すれば、

- ① この伝統的水稻直播栽培法は、南関東と九州に顕著にみられる。南関東の神奈川・東京・埼玉・茨城南西部ではツミタ(摘田)・マキタ(蒔田)といい、九州の福岡・大分・熊本・宮崎・鹿児島(種子島を含む)ではミマキ(実播)・ミウエ(実植)などと呼ぶ。
- ② 関東地方で摘田が行われたのは図3に見るように神奈川県の相模野台地、横浜・川崎市から東京南多摩地方におよぶ下末吉台地・多摩丘陵、東京都から埼玉県川越付近までの武蔵野台地・狭山丘陵、その北の入間台地・比企丘陵、北武蔵台地と秩父山地、荒川左岸の大宮台地や、利根川左岸の古河市東部の下総台地、このほか群馬県邑楽郡、茨城県東茨城郡の一部や千葉県柏市でも行われたが、ほとんどの例が、台地や丘陵地あるいはその縁辺部に立地するムラが、谷津田(谷戸田)や台地、丘陵下の水田で行っていた。
- ③ 摘田地帯は台地・丘陵やその縁辺部に立地するムラで、水田に比べて畑の割合が高い畑作優越地帯であり、摘田は播種を四月下旬から五月上・中旬に行うので、六、七月の麦・アワなど畑作物の収穫・作付期農繁期のピークを緩和できることと、田植えと違って播種に大量の水を必要としない利点がある。
- ④ 摘田は近世の地方史料にも「摘田」「蒔田」の記録が数多くあり、鎌倉市手広に残る『播種之日記』(1681～1683)がいちばん古く、各地の村明細帳

や『地方凡例録』(近世後期の地方書)など、近世前期以降の史料にみえる。

- ⑤ この稲作法は、明治期末ないし大正時代に、ほとんどの地域で田植えによる稲作法(植田という)に変わったが、埼玉県大宮周辺では昭和30年(1955)ごろまで摘田を行っていた。
- ⑥ 摘田の農法上の最大の特徴は、稲種子を堆肥・灰・下肥などと混ぜ合わせて播く種肥混合播にあり、田植稲作法とは異系統の農法といえる。
- ⑦ 種肥混合播は、常畑作における麦類・アワ・ヒエ・キビ・蕎麦・陸稻などでは、わが国の伝統的作付法の一つとなっていて、南関東の摘田地帯では、摘田の播種用具と畑作の種肥混合播用具とが共用されている例が多くある。これらから、摘田は、農法的には、畑作の種肥混合播を基礎に自律的な展開をしてきた稲作法と考えられる。

以上が小川論文の概要だが、摘田の具体的な作業について、大館勝治「埼玉の摘田とその用具」(1988)から補っておこう。

- ① 田摘みをする前に、田の表面にスジ(筋)をつける。
- ② 田摘みの朝、種籾をザルにあげ日陰におく。庭を綺麗に掃いて、堆肥のよく腐蝕したところを持ってきて麦篩にかけ、細かい堆肥を取る。堆肥と草木灰と種籾をクサカキ(草掻き道具)などで満遍なく混ぜる。混合の割合は、堆肥が一番多く、草木灰はそれほど多くはない。種籾は反当り五升ぐらいである。
- ③ 田摘み用のザルに堆肥と種籾を混ぜたものを入れ、左手でザルをかかえ、右手の三本指で種籾を摘み、腰をかがめて目標の位置に点播する。
- ④ 一番草では大きな草は取るが、「株づくり」が大きな目的である。株としてまとまりのない稲を両手で一つの株にまとめる作業である。摘田は土がやわらかいので、土ごと株に寄せることができる。また大きな株は間引きして少ない株に補植して、一株を七、八本ぐらいの株にする。

以上が小川直之、大館勝治氏による南関東の摘田の紹介である。

摘田は朝鮮系乾畚直播法の残存か 小川氏の⑥の種肥混合播や大館氏の②③で種籾と肥料をよく混ぜ合わ

せ、それをザルに入れて指で摘まんで点播していく方法は朝鮮半島の乾畚直播法と基本的には同じであることを確認しておこう。そしてその起源については小川氏は⑦で「摘田は、農法的には、畑作の種肥混合播を基礎に自律的な展開をしてきた稲作法と考えられる」と畑作地帯で自生的に生まれてきた稲作法、つまり日本国内で工夫し開発された稲作技術と理解されているようだが、これこそ朝鮮半島の乾畚直播法の残存であり、畑作丸ごと朝鮮系なのではないか。

朝鮮半島からの第1波の稲作民が各地で乾畚直播法による直播稲作を始めたが、その後第2波の江南系稲作民が田植え法を始めると、囃子を伴った早乙女による華やかな田植え神事の文化的魅力もあって、水利条件のいい地域では田植え法に乗り換えてしまったが、水利条件の悪い台地周辺の畑作地帯では田植え法への移行は無理なので、土地条件に合った稲作として伝来当初の乾畚直播法稲作が千数百年にわたって継承されてきたものと考えられる。

Ⅲ-4 関東以外での乾畚直播法の残存状況

ここでも精緻な実証で知られる小川直之氏の業績のお世話になろう。小川「畑作と摘田」(1988)は、関東地方の摘田分布に続けて、次のように述べる。

これらの他に近世の文献等にも摘田の記載のみられるものが多くある。『百姓伝記』『国家要伝』『地方凡例録』『成形図説』や佐藤信淵の『草木六部耕種法』、さらに新潟の『粒々辛苦録』、群馬の『樹芸考』にも摘田の記載がみられる。また、八王子市石川家の『諸色覚日記』、相模原市小川家の『社稷準繩録』、鹿児島名越家の『耕作万之覚』などの農業日誌にもあり、横浜市生麦の『閑日日記』、『新編武蔵国風土記稿』にも散見でき、神奈川県内では村明細帳などにも摘田の記載がある。概ねこれらの文献にみられる地方では、摘田について伝承からも確認できている。『国家要伝』『草木六部耕種法』『粒々辛苦録』をそのままその地方の農業事情とすれば、広島、近畿地方、新潟でも摘田が行われていたことになる。さらに、農務局編の『日本主要農作物新種要綱』(大正二年、大日本農会刊)を加えると、宮崎、熊本、大分、福岡、岡山、島根、京都、山梨県など

の一部でも摘田が行われていたことになる。農務局の資料の中には、北海道のように田植え法が明治中期から直播法になった地方もあり、一概にすべてを摘田と断定できないが、ともあれ、分布に關していえることは、今後の調査によっては、摘田の分布が大きく広がる可能性もあるということである。

この小川氏が摘田に類する直播法が行われていたとする地域を地方別に都道府県名で示せば、

関東地方：群馬・栃木・茨城・埼玉・東京・神奈川

北陸地方：新潟・富山

東海地方：静岡・愛知・三重

近畿地方：京都

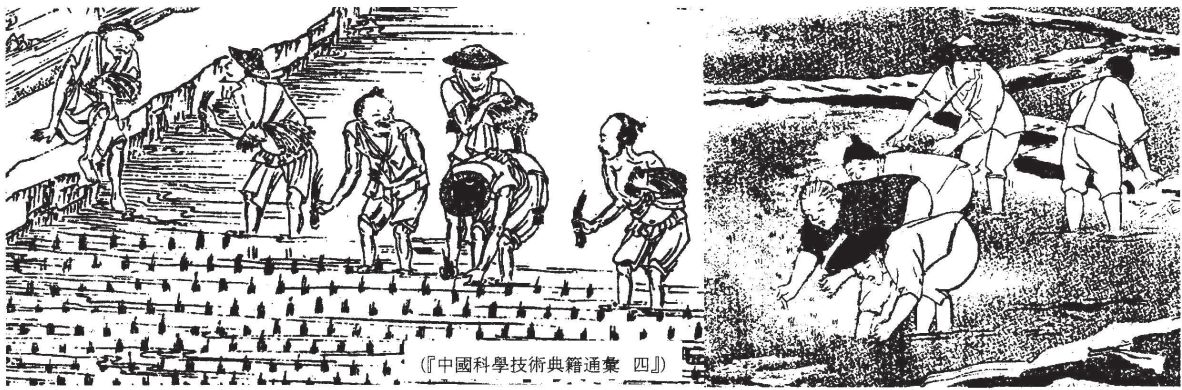
山陽地方：岡山・広島

九州地方：福岡・大分・熊本・宮崎・鹿児島（種子島を含む）

となり、京都府も見られるが京都市域は先に見たように一円田植え地域であったことからして、ここでの「京都」は京都府下であろう。こうして見ると、摘田に類する直播法は、奈良・大阪・京都という古代の首都からは遠い地域に分布しているように見える。これは先に見たように、先祖代々乾畚直播法をやっていた人たちが田植え法に乗り替えるきっかけは、華やかな田楽囃子と揃いの衣装の早乙女との掛け合い歌の醸し出す文化的魅力の高さだったことからすれば、近くに囃田式田植えの発信源となる江南系稲作民の大集落群がない地域では、伝統的農法である乾畚直播法が20世紀まで継承されてきたことになり、これまでの推測が正しかったことが検証されたことにもなる。

Ⅳ. 「女の田植・男の田植」から見た各地の田植え法

田植え法を男女のどちらが担当するかについては、貴州・雲南・東南アジア北部地方や日本は女の田植、江南漢族や朝鮮半島は男の田植という違いがある。この女の田植か男の田植かについては四季耕作図研究では重要なテーマなのだが、考古学界やイネ学界では関心が薄いようなので、ここで概観しておこう。



A 『康熙帝御製耕織図』 清代 17 世紀

B 『朝鮮風俗畫譜』 20 世紀

図4 中国・朝鮮半島は男の田植

IV-1 江南漢族は男の田植

華北の漢族社会では、古くから男は農耕、女は養蚕・機織りという性別分業が行われており、その觀念のもと将来帝王となる皇子が民衆の苦勞を知って育つようにと、いわば帝王学の教科書として男の農耕の耕起から収穫・倉入れまでを描いた「耕図」と、女の養蚕から機織りまでを描いた「織図」を合わせた「耕織図」が宋代以降たびたび作られており、南宋の「梁楷本耕織図」、明代の「宋宗魯本耕織図」、清代の『康熙帝御製耕織図』などの挿秧場面に男の田植が描かれていて、この「梁楷本耕織図」が日本に伝わって狩野派の画題となり、それが日本化して四季耕作図となった（渡部武 1986、冷泉・河野・岩崎 1996）。図4 Aには『康熙帝御製耕織図』の挿秧場면을掲げたが、男の田植が描かれている。

ところで華北の漢族は畑作だったので、本来田植えはやっていなかったが、なぜ耕織図で男の田植が描かれているかといえば、中国では3世紀の220年、後漢が滅亡し、魏・呉・蜀が対峙する三国時代を迎えるが、やがて265年に晋が再統一した。その晋も3世紀末には政權争いで混乱し、4世紀に入ると五胡と総称される北方異民族の侵入で弱体化して316年に滅亡、王族・貴族は農民も含む大集団で江南に移住し、317年東晋を建てた。この北方畑作民の江南水田地帯への集団移住によって漢族が稲作を始めることになったが、この時に華北の牛に引かせる畑作農具が江南地方に持ち込まれ、それを水田用に改造する技術革新ブームが起こった。遊牧地帯に接する華北は家畜の頭数が多くて

土を耕起する犁も碎土・攪拌する杷も牛の二頭引きだったが、江南地方は家畜頭数が少ない上、水田稲作の生産力は華北の畑作に比べてきわめて高く耕地面積は少なくて済むので一頭引きとなり、一頭引き曲轅犁が主流となった。また二頭引きの杷は一頭引き化されて長い歯を持った馬鍬が誕生、この誕生したばかりのまだ定型化していない段階の馬鍬が倭の五王の使節によって日本に持ち込まれ、各地から出土している（河野 1990、1994、1996）。

この時「男は農耕、女は養蚕・機織り」という強い固定觀念を持った華北の漢族が江南に来て田植え法稲作を始めたため、江南漢族社会では男の田植となった。そして耕織図はこの漢族が江南に来た南宋に初めて作成され、それが先例となったため、華北の畑作ではなく江南の稲作が繰り返し描かれて、時代ごとに男の田植が描かれているのである。

IV-2 朝鮮半島も男の田植

朝鮮半島北部は華北の漢族の畑作農業が持ち込まれた畑作社会であり、「男は農耕、女は養蚕・機織り」という華北漢族の觀念も持ち込まれ定着していたが、この「男は農耕」觀念の社会に先に見たように高麗時代に倭寇によって田植え法が移植されたので男の田植となった。図4 Bには『朝鮮風俗畫譜』の挿秧（田植え）場면을掲げたが、男4人に白髪の老女が一人加わっているが、これは年齢的に男女を超越した老女が助っ人に入ったままで、早乙女ではない。

IV-3 雲南省の少数民族は女の田植

貴州・雲南地方が女の田植であることは写真などで確認できるが、歌垣や竜舟競技と違って田植え場面の密着取材は意外と少ない。そうした中で須藤護(2013)は中国雲南省元陽県の山地の棚田で稲作を行っているハニ(哈尼)族の田植えの様子をレポートされていて貴重な記録となっている。それを適宜圧縮して紹介すると、

田植えの当日、田主の家で食事を済ませた一行は、主人、もしくは歌の上手な人が田植え歌を歌いながら女性たちを引き連れ、行列をなして水田までやってくる。先頭の男女が歌を掛けあいながら、そして後ろについている女性たちがそれにあわせて輪唱している。

水田の水口に着くと主人は水口に黄色の糯米のご飯を供えて田植えの無事を祈る。この間も女性たちの歌は続いている。その後、歌を歌いながら列を作って歩き、まず田主の妻が水田に入る。続いて手伝いの女性たちが入り田植えがはじまる。

田植えがはじまると男女二人の歌い手は畦道に立って、さらに歌い続ける。歌の内容は、田植えが始まって夕方仕事を終えて帰るまでを歌ったもので、歌の型は決まっているが、即興の歌詞まで歌われて、その場を盛り上げている。

というもので、この様子は広島県の山間部で行われてきた囃田と呼ばれる田植え行事とそっくりで、系譜的に同系の民俗行事であることの証左となろう。

また田植えのように人手のいる場合には、ハニ族の間でも日本の「結」と同じような労働交換が行われているという。

男女の作業分担とその理由 ハニ族の間では男女の作業分担がはっきり分かれていて、

男の仕事

水田や用水の管理・補修、田植えの日の苗取り・苗運び・苗束を植女の近くに投げる苗打ち、樹木の伐採、枝打ち、山を焼く作業、斜面の均し作業

女の仕事

田植え、稲刈り、草取り、手伝い人のための食事の支度、籾の乾燥と保管など

となり、「女人不鏟埂、男人不栽秧」(女性は水田の畦を直すことはしない、男性は田植えをしない)、「女人不管水、男人不背柴」(女性は水の管理をしない、男性は焚き木の柴は取らない)というハニ族のことわざがある、とする。

この男女の作業分担の理由について、須藤氏は高低差の激しい棚田の場合は水田や用水の管理・補修、苗取り・苗運びも強靱な体力と持続力を必要とする仕事なので男が分担し、他方、女性が行う作業はそれらの作業補助であって、これが男性優位の社会を築いてきた理由の一つであろう、とされる。高低差の激しい棚田地帯なので強靱な体力と持続力を必要とする仕事が多くて男性優位の社会を築いてきたとするのはその通りであろうが、ハニ族も含めて貴州・雲南地方・東南アジア北部の少数民族はもとは江南地方の稲作民が漢族の度重なる南下で追われて辿り着いた山地で暮らすようになったという点は諸氏の一致するところであり、この江南地方から雲南省の山中までの困難な逃避行の全期間を通して男性が防衛と重貨の運搬を担ってきたという歴史的経緯も男性優位の社会と無関係ではなかろう。

ただ女性が田植えを分担することについては江南地方の平地暮らしの頃からの伝統的なもので、ハニ族のことわざに「女人不鏟埂、男人不栽秧」とうたわれていることも、その起源の古さを示すものであり、高低差の激しい棚田の労働強度とは一応無関係と見ておいていいのではないか。

女の田植は田の神の歓待か 日本も含めて田植えを女性の早乙女が担当するのは、田の神が男性と見られていて、その男の神を歓待して豊作を願うために笛や鼓と掛け合いの歌声で賑やかに囃し立てる中で、揃いの衣装で着飾った早乙女たちが歌いながら一斉に田植えするという「囃田」の形式となった、と考えるのが穏当ではないか。

IV-4 日本の稲作も女の田植が基本

倉田一郎『農と民俗学』(1985)は、初田植えをサオリ、田植えを終えた祝いをサナブリやサノポリと呼ぶことについて、「本土ではこのサオリは田植の終了を意するサノポリの対語であって、サノポリはこれを

サナブリともいっているが、サオリのオリに対するノボリという語をふくむもので、今日では少なくともサとよぶ農神が田植の前後に天から昇降するとの信仰にもとづく語であることは、ほぼ民俗学上の常識と化したのである。すなわち初田植においてサの神が降るがゆえにこれをサオリといい、田植終りとともにサの神が昇天するがゆえにこれをサノボリといい」と説明している。

小川直之（1999）はこれをさらに進めて、「旧暦五月の田植えに関連した伝承には、サツキのほかにサナエ、サオトメ、サビラキ、サオリ、サノボリなど「サ」の付く言葉が多い。これらはいずれも「サ」を接頭語として成り立っており、サ月・サ苗・サ乙女・サ開き・サ降り・サ昇りと解釈でき、接頭語の「サ」に特別な意味があるのが分かる。田植え開始時のサオリは田の神迎え、終了時のサノボリは田の神送りの儀礼なので、これからいえば「サ」は田の神の意味をもつといえる。サビラキは田植え初めの田の神祭、サオトメは田の神をまつる乙女、サツキは田の神をまつる月ということになる」と簡潔・的確にまとめている。これこそ江南系稲作民がもたらした田植え法であろう。

神事や古代史料にも早乙女の田植 古くからの神社では神事として御田植祭が行われていて、千葉県香取市の香取神宮の御田植祭、三重県志摩市の伊雑宮の磯部の御神田、大阪市の住吉大社の御田植祭は日本の三大御田植祭とされ、住吉大社では社殿の横の神田で牛の代掻きの後、替植女（早乙女）による田植えが奉納されている。

また『栄華物語』の「御裳着」巻には、治安3年（1023）5月に、一条天皇の中宮の上東門院藤原彰子が土御門邸を訪れたときに、御殿付属の厩の秣田が隣にあったので、父の藤原道長の計らいで築地塀の一部を壊して秣田の田植えの様子を御覧に入れた。田主の翁を先頭に若い女5、60人が田楽囃子とともにやってきて、賑やかに囃しながら田植えする様子を公家たちは縁側で眺めて和歌を詠んで興じたという。

こうした天皇や院・公家たちが囃田方式の田植えを觀賞することはたびたび行われたようで、大治2年（1127）5月4日に白河院・鳥羽院と待賢門院が鳥羽に御幸されて「田殖興」があった（『百練抄』）、同じ

く大治2年5月14日には白河院・堀川院・鳥羽院が鳥羽に御幸されて「田種興」があった。種女（植女）は22人で金銀の装束で牛2頭が出て田楽があった（『中右記』）。大治3年（1128）5月11日に白河院・鳥羽院が八条大宮の水閣に御幸されて「田殖事」があった（『百練抄』）、大治4年（1129）5月10日に八条殿で「種田事」があった。種女20人田楽法師ら10余人（『長秋記』）。治承3年（1179）6月6日に関白藤原基房が宇治に向かわれて田植え・田楽があった（『玉海』）（以上『古事類苑』40）。これらは皇族による私的な田植えの觀賞であるが、^{まつりごと}政の一環としての王の一族による田植えの祝福と豊作祈願という側面も含んでいたであろう。

また『枕草子』には、「賀茂へまゐる道に、田植うとて、女の、新しき折敷のやうなる物を笠に着ていと多う立ちて歌を歌ふ。折れ伏すやうに、またなに事するとも見えで後ざまに行く、いかなるにかあらむ」と早乙女の後ずさりの後退植えを觀察・記録している。

ヤマト政権・律令国家は田植え稲作をベースにした国家 天皇の行う行事の中で重要なものに11月下卯日と翌日の2日間に行われる「新嘗祭」があり、夕刻沐浴潔斎した天皇が神嘉殿に入り、天皇みずからが神々とともに新穀による神酒・神饌を食する儀式である。また新天皇が即位した年の新嘗祭は、「大嘗祭」として臨時に大嘗宮を造営して、あらかじめ卜定した悠紀国・主基国の斎田からの新穀で大々的に行われる。この新嘗祭や大嘗祭は天皇が稲作国家の長であること表示しており、ひいては大王・天皇に統治されるヤマト政権・律令国家は稲作をベースにした国家、言い換えれば稲作はヤマト政権・律令国家の基幹産業であったことが分かる。そしてその稲作の中身は、先ほど述べたように天皇・公家がたびたび囃田方式の早乙女の田植えを觀賞していることからして、田植え法の稲作であったと考えられる。

ヤマト政権・律令国家は田植え稲作をベースにした国家であったとするなら、それは江南系稲作民のつくった国家であり、江南系稲作民はすでに朝鮮系稲作民が先に来住して各地に定着していた日本列島に後から割り込んできた勢力であることからすれば、先住の朝鮮系稲作民集落は乾畚直播法、後来の江南系稲作民

A 福島県いわき市 荒田目条里遺跡 2号木簡

郡符、里刀自、手古丸、黒成、宮澤、安継家、貞馬、天地、子福積、奥成、得内、宮公、吉惟、勝法、圓隆、百濟部於用丸、真人丸、奥丸、福丸、藤日丸、勝野、勝宗、貞繼、浄人部於日丸、浄野、舍人丸、佐里丸、浄繼、子浄繼、丸子部福繼、不、足小家、壬部福成女、於保五百繼、子槐本家、太青女、真名足、不、子於足、合卅四人

大領於保臣 奉宣別為如任件 以五月一日

「郡符、里刀自、手古丸、黒成、宮澤、安継家、貞馬、天地、子福積、奥成、得内、宮公、吉惟、勝法、圓隱、百濟部於用丸、真人丸、奥丸、福丸、藤日丸、勝野、勝宗、貞繼、浄人部於日丸、浄野、舍人丸、佐里丸、浄繼、子浄繼、丸子部福繼、不、足小家、壬部福成女、於保五百繼、子槐本家、太青女、真名足、不、子於足」合卅四人

大領於保臣 奉宣別為如任件 以五月一日

B 山形県米沢市 古志田東遺跡 2号木簡

田人廿九人 女廿人 又卅九人 男八人 女卅一人

田人廿九人 女廿人 又卅九人 男八人 女卅一人

↑『古志田東遺跡』米沢市

(福島県立博物館『いにしえの木の匠』1996)

図5 東北地方平安時代木簡の 女の田植・男の田植

集落は田植え法という稲作法のモザイク模様が各地で見られてよさそうである。では実態はどうか。

IV-5 平安時代木簡に見る男の田植・女の田植

女の田植・男の田植を考える上で興味深い平安時代の東北地方の木簡が2点出土しているので見ておくことにしたい。

福島県荒田目条里の田植え木簡 福島県いわき市の荒田目条里遺跡は陸奥国磐城郡衙から1.5 km北西に位置していて、図5のAに掲げた2号木簡が田植えの動員名簿である。長さ59.2cmで長さ2尺(60cm)とされる郡符木簡の規格品であり、内容は里刀自(里長の妻)あてに出された「五月三日に郡司職田の田植えをするので36人を召し連れよ」という動員令で、36人の名が記されており、名前の右肩には「、」のチェックがあり、チェックのない二人には「左肩に「不」と記され、別筆で「合卅四人」とあることから、当日里刀自は欠席者を除いた34人を率いて名簿木簡を携えて現場に出頭、郡司は木簡を受け取って名前を読み上げながら出席をチェックして34人を確認した、という様子が復原できる。その後用済みの木簡は悪用されないよう半分に折って廃棄したようで、木簡はちょうど中ほどで折れている。

名前から男女を見分けると、女は里刀自・壬部福成女・太青女の3人だけで、残り33人は男であり、基本的に男の田植え地帯であったことが分かる。時代は3号木簡に「仁寿三年(853)」とあるので、9世紀中ごろの陸奥国の状況である。

田植えを仕切るのは里刀自であることは、女の田植の系譜を引くともいえるが、女は3人で残り33人は男という男の田植状況は、この地の田植えが男の田植の朝鮮系稲作民の集落から伝わったものであったことを物語っている。ただそれがどこかについては手掛かりはない。

山形県古志田東遺跡の田植え木簡 Bに掲げたのは山形県米沢市古志田東遺跡の田植え木簡で、こちらは女の田植地帯だったようだ。古志田東遺跡は9世紀後半から10世紀初頭の古代置賜郡内の有力豪族の居館と考えられ、律令国家が衰退する中で地方豪族や有力者層が台頭し、自らの支配基盤を拡大する過渡期にあ

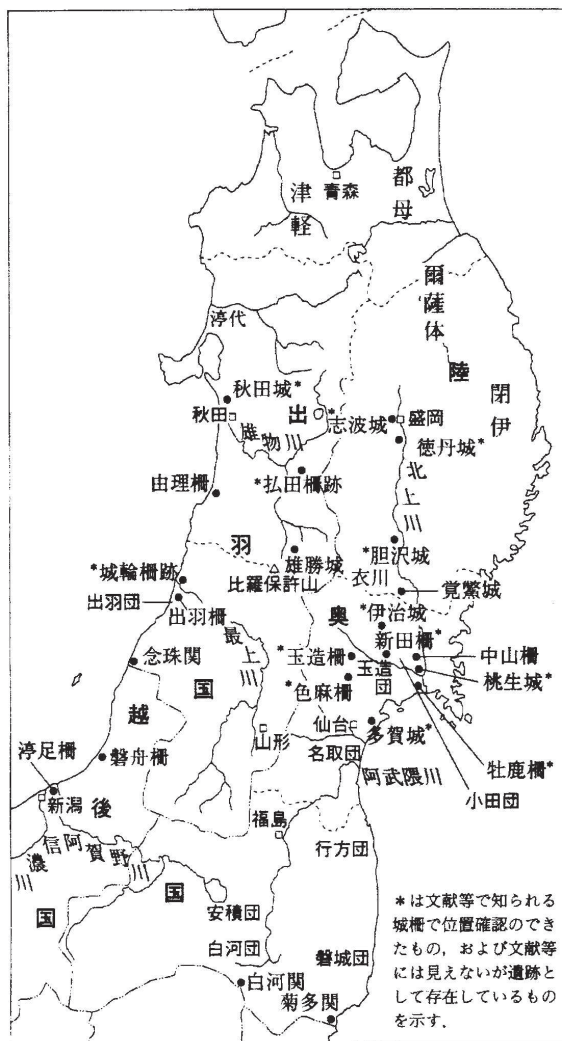


図6 東北地方の城柵建設(鈴木拓也 2008)

たっている。

木簡の記載を見ていくと、図5Bの読み下し文では「□田人廿九人」から始まっているが、木簡そのものの墨書は「田人」の上に2文字が確認でき、2字目は明らかに「代」なので、ならば2文字は「殖代(植代)」ではないか。ひとまず仮説として提起しておきたい。

木簡の内容は、先に動員通知をしていた田人=田植え要員について、当日現場で出席者を点呼した際の記録で、上段に「[殖]代田人/(男)九人/女廿人」、下段には「又女卅九人/女卅一人/男八人」とあり、二つのグループから合わせて68人が動員されており、二つの集落から荒田目条里のような個人名の指定なしに田植え要員を動員したものと考えられる。男女比は上段は女69%、下段は女79%であることからして女の田植地帯であり、30~40%の男は田植え直前の本田の植代掻き、苗取り、苗運び、苗打ちや笛や鼓での

表5 東北地方への柵戸入植年表

(平野卓治製作)

西暦	和暦	年月	配置先	民	戸・人数	出身国	典拠
648	大化	4	磐舟柵	民		越・信濃	日本書紀
714	和銅	7・10	出羽柵戸	民	200戸	尾張・上野・信濃・越後	続日本紀
715	養老	元・5	陸奥	富民	1,000戸	相模・上総・常陸・上野・武蔵・下野	続日本紀
716		2・9	出羽	百姓	各 100戸	信濃・上野・越前・越後	続日本紀
717		元・2	出羽柵戸	百姓	各 100戸	信濃・上野・越前・越後	続日本紀
719		3・7	出羽柵	民	200戸	東海・東山・北陸	続日本紀
722		6・8	陸奥鎮所・柵戸		1,000人	所国司簡点	続日本紀
757	天平宝字	元・4	陸奥国桃生柵	不孝・不恭			続日本紀
			出羽小勝	不友・不順者			
		元・7	出羽国小勝村柵戸	橘奈良麻呂の乱の加担者			続日本紀
758		2・10	桃生城柵戸	浮宕の徒		陸奥	続日本紀
759		3・7	出羽国柵戸	左京犯罪人			続日本紀
		3・9	雄勝柵戸	浮浪人	2,000人	坂東8国・越前・能登・越後	続日本紀
760		4・12	桃生柵戸	薬師寺破戒僧			続日本紀
762		6・閏12	陸奥国	乞索児	100人		続日本紀
763		7・9	小勝柵戸	河内国丹比郡の人(母を殺害)			続日本紀
769	神護景雲	3・正	陸奥国柵戸	浮宕の百姓	2,500余人		続日本紀
795	延暦	14・12	伊治村	軍を逃れた諸国の軍士	340人		続日本紀
796		15・11	伊治城	民	9,000人	相模・武蔵・上総・常陸・上野・下野・出羽・越後	日本後紀
802		21・正	胆沢城	浪人	4,000人	駿河・甲斐・相模・武蔵・上総・下総・常陸・信濃・上野・下野	日本紀略

(『東へ西へ―律令国家を支えた古代東国の人々―』横浜歴史博物館 2002)

囃方や音頭取りの歌い手などの要員であろう。ではこの地の女の田植はどこから伝わったのか。

女の田植は上野国からか 東北地方日本海側の出羽地方はもともと縄文系住民である蝦夷の居住域であり、古墳時代まではまだ稲作民の踏み込めない領域であった。律令国家は図6に見るように647年に淳足柵(新潟市)、648年に磐舟柵(新潟県村上市)、709年に伊治柵(所在地不詳)、733年には出羽柵を北に移転して秋田城を建設するなど北へ北へと支配の拠点を築き、城柵建設と維持を担う「柵戸」として東国住民を集団移住させた。表5がその一覧表で、757年以降は犯罪人や浮浪人が増えるが、それ以前は何百戸単位で住民を移住させて支配地の内地化を図った。その入植地が陸奥か出羽かに注意して見ると、759年以前は出羽国が圧倒的に多いことが分かる。陸奥に比べて在来住民との軍事衝突が少なかったのか東国住民の入植が比較的スムーズに進んだと考えられる。

こうした中で東北地方にも田植え法が持ち込まれるわけだが、出身国のうち尾張・武蔵・常陸などは朝鮮系稲作民が多くて男の田植であろうが、頻りに現れる上野は女の田植、信濃も上毛野氏の影響の強い北部なら女の田植であろう。とりわけ上野は皇族出の上毛野氏の拠点で、崇神天皇の皇子の豊城入彦命を始祖と

している。四道將軍派遣の折りに北陸道派遣の將軍大毘古命に従軍して上野に設定された植民地に入植したのであろう。その後裔の上毛野氏は対蝦夷戦でたびたび活躍し、ヤマト政権による東日本支配の中心的役割を果たした。

陸奥・出羽地方に多数の柵戸を送り込むとなるとその拠点、各国からの柵戸を集めて目的地に送り出す拠点が必要となる。そうした場合、陸奥へは下野が拠点となり、出羽へは上野が拠点となって越後を通して出羽に送り込むのが順当な道ではないか。この上野は皇族出の上毛野氏の拠点であり、女の田植地域と考えられることからして、古志田東遺跡木簡の女の田植も上野系であろう。ということは古志田東遺跡の居館の主の有力豪族も上毛野氏系である可能性も考えられる。

羽後＝秋田県の女の田植 古志田東遺跡よりさらに北の羽後＝秋田県の各郡もショトメ・ソウトメなど呼ばれる早乙女による女の田植地域で、田植え歌も数多く記録されている(『田植えの習俗3』1968)。もちろん県内各地の田植えの広がり近世17世紀後半の秋田藩による新田開発の結果でもあるが、すでに県内に女の田植が根付いていたために新田開発とともに広がったのであろう。上野に拠点を置いた上毛野氏の出羽地方に及ぼした影響はことのほか大きかったと考え

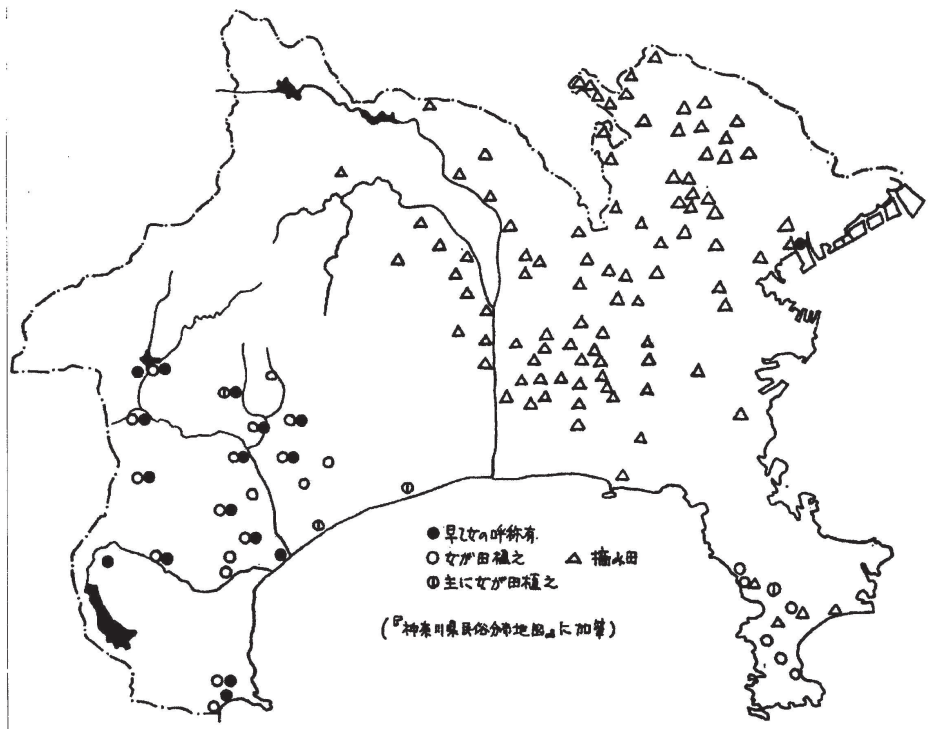


図7 神奈川県の水田（早乙女）と摘田の分布図（小川直之 1985）

られる。

では荒田目条里の男の水田はその後どうなったかと言えば、加藤治郎『東北稲作史』（1983）によれば、「植手は昔から早乙女と言われるように女が主役であることは今も変りがない。地方によりショトメ（本荘、飯詰）、ソトメ（秋田、津軽、二戸、尻内）、ソウトメ（会津、猪苗代）などと呼ばれているが、何れにしても水田にあたってウエヒトは女性であり、水田の中心がソトメにあった」とあるように近代の時点では陸奥・出羽含めて東北地方全域が女の水田となっており、荒田目条里もある時期に男の水田から女の水田に替わったようである。それがいつかは興味深い課題であるが、それ自体が小論のテーマになりうるので別稿で検討することにしたい。

IV-6 関東地方の水田・男の水田

また小川直之氏には「女の水田・男の水田」という興味深い論考があり（小川 1985）。図7の分布図を掲げて展開している。その要点を箇条書きにまとめると、

- ① 神奈川県西部や三浦半島では女性が行うとしているのに対し、神奈川県中央部以東では男、あるいは男女とも行う傾向がはっきりとみられる。
- ② 中井町や秦野市で女の水田・男の水田が混在

し、この地域より西の丹沢山地以南と三浦半島の横須賀市西部及び三浦市北部は女の水田地帯、中井・秦野以東から相模川上流域、三浦半島北部以北は男の水田地帯となっている。

- ③ 神奈川県西部の「早乙女」の語彙は、水田唄などとともにこの地域から西へ富士山東麓、伊豆、さらに富士川までの範囲で確認できる。早乙女、水田唄等々からすると富士川以東から箱根・伊豆、酒匂川流域にかけての地域は一つの文化圏をなす。
- ④ 水田は女が行うとする観念と早乙女の語は、日本の稲作文化を理解するためのポイントとされてきたが、神奈川県の中部以東から東京都にかけては水田は男が行うとする所が多く、ここでは水田は女性と限定的結びつきをもたない。
- ⑤ 水田と男性の結びつく相模川以東の地域は、摘み田、蒔田といわれる水稻直播栽培が広く行われていた地域であり、摘み田での稲の直播は男の仕事だったので、水田法に移行しても男の仕事となっていたのではあるまいか。

となる。

東日本における江南系稲作民と朝鮮系稲作民の棲み分け
五月・早乙女・女の水田が日本の稲作の根幹という

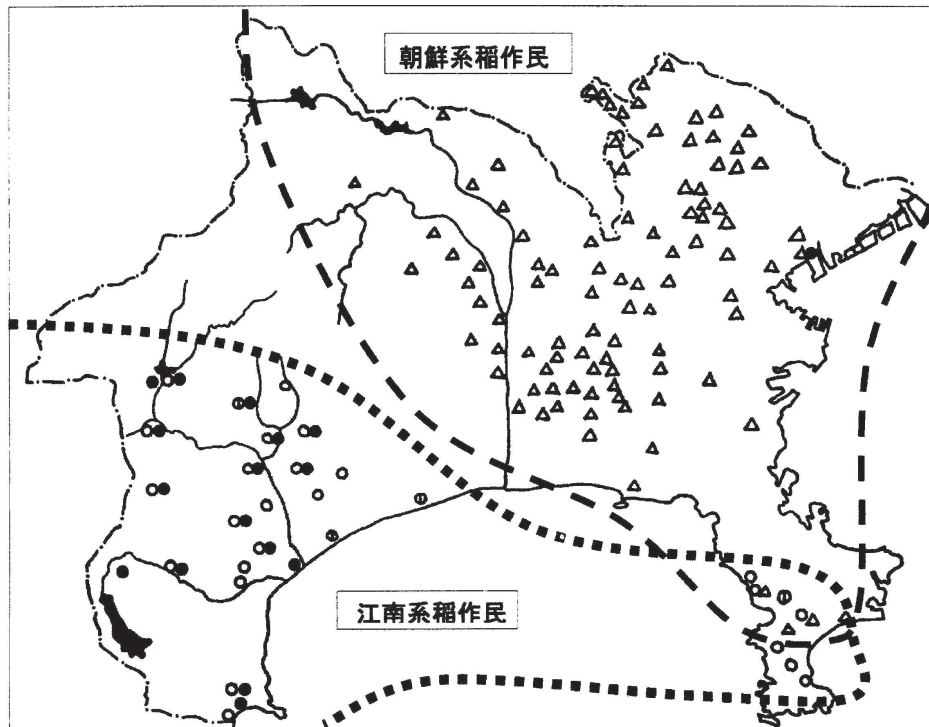


図8 神奈川県の朝鮮系稲作民と江南系稲作民の棲み分け復元図

理解が広く共有され一般常識となっている中で、小川氏の詳細な調査によって神奈川県東部から関東地方にかけての男の田植地域が検出された意義は大きい。⑤の摘田での稲の直播は男の仕事だったので、田植え法に移行しても男の仕事となったのであろうとする小川氏の指摘はその通りで、そして摘田そのものが先に見たように朝鮮系稲作民の持ち込んだ乾畚直播法の関東版と考えられ、したがって女の田植と男の田植の分布の違いも江南系稲作民と朝鮮系稲作民の棲み分けを示していることになるので、小川図をベースに江南系稲作民と朝鮮系稲作民の棲み分け図を作成したのが図8である。

神奈川県の東北部を粗い点線で囲ったのが摘田や男の田植の朝鮮系稲作民の領域で、北東方向に東京都・埼玉・群馬・茨城・千葉県の一部を含んで広がっている。それに対して細かい点線で囲ったのが女の田植の江南系稲作民で、神奈川県西部から西富士山東麓、伊豆、さらに富士川までの範囲に広がっている。つまり神奈川県域は朝鮮系稲作民と江南系稲作民の分布の境界領域だったことが、小川氏の緻密な研究によって浮かび上がってきたのである。

V. 考古資料から見た朝鮮系稲作民と江南系稲作民の痕跡

V-1 種粃を貯蔵穴=穴倉で保管していた板付遺跡

朝鮮半島から日本に稲作を持ち込んだ初期の頃の遺跡として知られる福岡県の板付遺跡は、弥生時代早期の環濠集落で、ここでは種粃や収穫した穀物は高床式倉庫ではなく地下の貯蔵穴=穴倉で保管していた。

穴倉は佐原真氏が「中国では、新石器時代いらい寒く乾いた華北では穴倉、暑く湿った華南では高床倉庫を使っている」（佐原 1987）と述べるように、地下貯蔵穴での穀物保管は本来畑作に伴うものであることからして朝鮮系稲作民の伝えたのは畑作化した変形型の稲作であり、おそらく直播法であって田植えはやっていない。寺沢薫（2000、2008）は貯蔵穴について「西日本では、縄文晩期以降、ドングリ・ピットが目立って見つかるようになるが、不思議なことに、縄文より弥生時代前～中期にかけての発見が多い」と述べるが、それを縄文系の ドングリ・ピットと見ずに朝鮮系稲作民の貯蔵穴と見てはどうか。例として挙げられた福岡県春日市門田遺跡、大阪府岸和田市下池田遺跡、滋賀県米原市本願寺遺跡は、朝鮮系稲作民の集落だったことになるが、それで辻褄が合うのか、他の考古遺物による検証をお願いしたい。

V-2 弥生土器から見た大和川系と淀川系

ヤマト政権の基盤となった奈良盆地・大阪平野の弥生時代から古墳時代にかけての歴史展開に関連して、佐原眞（1970）は弥生土器に大和川系と淀川系という違いがあることに注目し、それを承けて白石太一郎が古墳時代から6世紀の継体天皇擁立運動にも関連させて述べている。この大和川系と淀川系の違いは、畿内における朝鮮系稲作民と江南系稲作民の棲み分けに関連する可能性があるのを見ていくことにしよう。

佐原眞の弥生土器の大和川系と淀川系 佐原眞「大和川と淀川」（1970）は大阪平野の弥生土器について、北部の淀川流域と南部の大和川流域で形状が異なるという指摘をしている。本稿に関わる部分を箇条書きで要約すれば、

- ① 畿内の弥生土器の種類・文様・手法などをも考え合わせると、北部（摂津・北河内・山城）と南部（大和・中河内・和泉）の二つに分けられる。
- ② 突帯文は、北部の摂津ではけっして多くはないが、そう珍しいものでもない。それに対して南部の大和・中河内・和泉では、まれにしかみられない。その反面、南部では、スダレ文様（簾状文）の櫛描き文が大いに発達するが、北部の摂津・北河内では珍しいものとなる。
- ③ この畿内北部は淀川水系の地域で西摂平野も含むのに対して、南部は大和川水系の大和・中河内・和泉を含む。
- ④ 石器では銅剣形の石剣と磨製石鏃とは畿内北部の特徴で、打製の石小刀・石鏃・石槍は南部を特徴づける石器といえる。
- ⑤ 弥生時代中期の中ごろでは北部と南部の対立が明確だが、中期の終わりから畿内南部の主導で一体化の道をたどり、後期になってますますその傾向が強くなる、と指摘している。

V-3 白石太一郎の古墳分布の大和川流域と淀川流域

この佐原説を承けて白石太一郎「考古学から見た畿内と近国」（2006）は古墳分布の大和川流域と淀川流

域の違いに言及した。その要点を本稿と関わりのある部分に絞って箇条書きで示すと、

- ① 墳丘の長さがほぼ200 m級以上の大型の前方後円墳は、日本列島全体で38基を数えるが、そのうち34基は畿内地域にみられる。
- ② 畿内の34基の大型古墳のうち33基は、南部の大和、河内、和泉の地域にあり、北部の摂津・山城の地域にはわずか1基が知られているにすぎない。
- ③ 畿内北部の淀川水系では摂津の三島、北河内、山城北西部の乙訓、山城南部の相楽など、その要所要所に有力な政治勢力が独立して存在していたが、畿内南部の地域では出現期古墳がすべて大和川最上流の奈良盆地東南部に集中し、すでに全体が一つの大きな政治集団に統合されており、奈良盆地東南部の勢力の覇権が確立していたため、葛城や曾布、河内南部・和泉北部などの在地勢力は大型前方後円墳を造れなかったと思われる。
- ④ 畿内南部の大和川水系で、出現期の大型古墳が集中して営まれる奈良盆地東南部こそ、本来の“やまと”の地にほかならない。
- ⑤ 4世紀後半から末葉になると、ヤマト政権の盟主墓と想定される巨大な前方後円墳が大阪平野南部の古市古墳群や百舌鳥古墳群に営まれるようになり、ヤマト王権の中での盟主権が“やまと”の勢力から河内南部の勢力に移動したことが想定できる。
- ⑥ 国際的な危機の情勢に対して、大和・河内連合の中でもおそらく3世紀段階から西日本各地や朝鮮半島との交渉・交易の実務を担当していたと思われる河内の勢力が、呪術的・宗教的性格の強い大和の勢力に替わって、王権のリーダーシップを掌握したものと想定される。それは決して王朝の交替といった出来事ではなく、あくまでも畿内南部を基盤とするヤマト王権の中での盟主権の交替にほかならなかった。
- ⑦ このことは直木孝次郎による、7世紀においてヤマト王権の中核をなす有力豪族＝大夫氏族の多くが大和と河内から出ていること、8世紀末

葉以前の相嘗祭に幣帛を受ける神社も、大和9、河内（摂津の淀川南側を含む）2、紀伊4で、やはり摂津や山城にはまったくみられないことから、ヤマト王権の地域的基盤が大和・河内であることが立証されている。

- ⑧ 初期ヤマト王権が奈良盆地東南部にあった時代には、“やまと”の外港として大阪湾東岸の諸港とともに紀ノ津を擁する紀ノ川の重要性が高く、和歌山市鳴滝遺跡の5世紀初頭の7棟の大型倉庫群も紀ノ津に伴うものであろう。この地域は紀伊の海人からなる水軍をも傘下におさめた紀氏の本貫地であろう。

となる。

継体天皇擁立運動に関する白石氏の見解 これに続けて白石氏は別論文「倭国の形成と展開」（2006）でも6世紀の継体天皇擁立運動にも言及されているので、その箇所を見ておこう。

- ①『日本書紀』によると武烈の没後後嗣がなかったので、応神五世の孫という継体が大伴金村によって迎えられ、河内の楠葉で即位したという。記・紀が伝える継体の后妃の多くは近江・尾張など畿内東辺の勢力の出身であり、こうした点から継体の擁立には近江・尾張など畿内東辺の勢力が大きな役割を果たしたと考えられている。
- ② 継体の王権獲得には、畿内でも北の摂津や山背の勢力もきわめて大きな役割を果たした。ヤマト王権の本来の地域的基盤は一貫して畿内南部の大和川水系とその周辺であり、5世紀以前では、淀川水系の勢力がヤマト王権の政治に直接かわることはなかったが、三島古墳群には、5世紀中葉に太田茶臼山古墳（現継体陵、227 m）という巨大な前方後円墳が一基だけ造営され、摂津の勢力が一定の地位をしめるようになった。
- ③ そして6世紀には継体陵とされる今城塚(190 m)が三島古墳群に建設される。それまで畿内南部の大和・河内の勢力に押さえられていた摂津の勢力が、畿内東辺の勢力と提携して王権を掌握した結果であることはいうまでもなからう。
- ④『日本書紀』によると、継体は即位後、北河内の楠葉宮から山背の筒城宮、弟国宮というように淀

川水系を転々とし、大和に入ることができたのは、即位から20年後のことであったという。これは継体が王権の継承を主張しても、それを認めない勢力が大和・河内をはじめ各地にいたことを物語る。

というもので、継体天皇擁立運動は、大和川水系の勢力に抑えられてきた淀川水系の勢力が5世紀には力を持ち始め、近江・尾張など畿内東辺の勢力の支援で継体天皇の擁立に成功したものと、大和川水系勢力と淀川水系勢力の対峙の文脈の中で説明されている。

このように考古学の成果からは弥生時代から古墳時代の後期の継体天皇時代まで、政権中枢の畿内において大和川系勢力と淀川系勢力の対峙と確執が確認できるとのことだが、奈良盆地・大阪平野を擁する大和川系勢力は圏内に初期ヤマト政権の箸墓古墳や纏向遺跡、5世紀の古市古墳群・百舌鳥古墳群を含んでいることからしてヤマト政権そのものであり、奈良盆地・大阪平野は田植え法の中心地域であることからして、ヤマト政権を構成する勢力は田植え法を日本列島に持ち込んだ江南系稲作民と考えられよう。そうであればそれと対抗する淀川水系勢力は先住の朝鮮系稲作民勢力となろう。

これは佐原真・白石太一郎氏による畿内における大和川水系と淀川水系勢力の拮抗と棲み分けの研究から導いた結論であるが、私の目から見れば、

淀川水系勢力＝先住の朝鮮系稲作民

大和川水系勢力＝後来の江南系稲作民

のように見えている。その推定の根拠は畿内の在来犁分布の詳細な調査結果にもとづくものなので、分量の関係上、続編で論じることにした。

V-4 考古研究者による弥生遺跡の朝鮮系・江南系の読み分けが課題

これまでの検討から、「日本列島への稲作伝来」、人主語話法で言い換えれば「日本列島への稲作民の来住」には第1波がAルートの朝鮮系稲作民の北部九州への来住で、第2波がBルートでの江南系稲作民の南九州来住の2系統で2度あったことが明らかになった。これまで板付遺跡の用水路・排水路、井堰、水口を備えた水田と、岡山県百間川原尾島遺跡の田植え跡

を結びつけて、「弥生時代の稲作は用・排水施設の整った水田と直播ではなく田植え法という完成した形態で伝来した」と語られてきた。ところが本稿の検討結果からすれば、板付遺跡での種籾保管は高床式倉庫ではなく穴倉で、穴倉は華北の畑作地帯の貯蔵法であることからして畑作化した変形稲作であり、イネの栽培法はおそらく乾畚直播法であって、田植え法ではない。これまでの考古学界が稲作伝来の朝鮮半島単系説に寄り掛かってきたことから来る重大な見落としである。穴倉の板付遺跡や山口県防府市大崎遺跡・岡山県津山市領家遺跡は朝鮮系稲作民なら田植え跡の百間川尾島遺跡は江南系稲作民、高床式倉庫で有名な登呂遺跡は江南系稲作民の集落であろう。

先に佐原眞・白石太郎らの指摘する弥生土器の大和川系は江南系稲作民、淀川系は朝鮮系稲作民に比定したが、こうした読み分けが各地の弥生時代遺跡で可能な筈だが、日本列島への稲作伝来の朝鮮半島単系説に固執し寄り掛かってきたために、この大きな仕事が宿題として山積みのままなのである。至急、読み分け作業にかかれることを各地の考古研究者に期待したい。とくに関東の摘田分布域が朝鮮系弥生人の分布域と重なるのか、関東の考古研究者による検証をお願いしたい。

おわりに

以上長々と考証を続けてきたが、本稿は考古研究者の皆さんに読んでいただくことを念頭に執筆を進めてきた。ぜひ反応をお聞かせいただきたい。いまコロナ禍の中ズーム方式の研究会が増えて異分野間の交流も容易になってきている。この機会に考古研究者・イネ学・環境史観研究者間の交流が盛んになることを期待したい。

本稿の成果を踏まえて次稿では、神武東征伝承を史実の反映と見て、ニニギノミコト一行が鹿児島県笠沙碕に上陸してから大和制圧、その後の6～7世紀への展開を朝鮮系稲作民勢力と江南系稲作民勢力の確執を軸に在来犁分布調査の成果を踏まえ、安田喜憲説との異同も確認しながらたどることにしたい。

【参考文献】

- 網野善彦 1998『東と西の語る日本の歴史』講談社学術文庫
- 池橋宏 2005『稲作の起源 イネ学から考古学への挑戦』講談社選書メチエ
- 池橋宏 2008『稲作渡来民 「日本人」成立の謎に迫る』講談社選書メチエ
- 石川日出志 2010『農耕社会の成立』シリーズ日本古代史 ①岩波新書
- 上山春平編 1969『照葉樹林文化—日本文化の深層』中公新書
- 上山春平・佐々木高明・中尾佐助 1976『続・照葉樹林文化—東アジア文化の源流』中公新書
- 上山春平・渡部忠世編 1985『稲作文化—照葉樹林文化の展開』中公新書
- 梅原猛・市川健夫・四手井綱英他 1990『ブナ帯文化』思索社
- 大館勝治 1988「埼玉の摘田とその用具」『湿田農耕』双書フォークロアの視点 3 岩崎美術社
- 小川直之 1985「女の田植・男の田植」相模民俗学会報『民俗』119・120 合併号
- 小川直之 1986「南関東の水稲直播き(関東地方南部)」『技術と民俗(下巻)=都市・町・村の生活技術誌=』小学館 日本民俗文化大系
- 小川直之 1988「畑作と摘田」木下忠編『湿田農耕』双書フォークロアの視点 3 岩崎美術社
- 小川直之 1995『摘田稲作の民俗学的研究』岩田書院
- 小川直之 1999「さつき 皐月」『日本民俗大辞典 上』吉川弘文館
- 加藤治郎 1983『東北稲作史』宝文堂
- 木村茂光 1996『ハタケと日本人 もう一つの農耕文化』中公新書
- 熊谷公男 2001『大王から天皇へ』講談社日本の歴史 03、2008 講談社学術文庫
- 倉田一郎 1985『農と民俗学』民俗民芸双書 岩崎美術社
- 河野通明 1994『日本農耕具史の基礎的研究』和泉書院
- 河野通明 2015『大化の改新は身近にあった 公地制・天皇・農業の一新』和泉書院
- 佐々木高明 1997『日本文化の多重構造—アジアの視野から日本文化を再考する』小学館
- 佐々木高明 2007『照葉樹林文化とは何か 東アジアの森が生み出した文明』中公新書

- 佐藤洋一郎 1996『DNA が語る稲作文明 起源と展開』NHKブックス
- 佐藤洋一郎 2002『稲の日本史』角川選書
- 佐原真 1970「大和川と淀川」『古代の日本 第5巻 近畿』角川書店
- 佐原真 1987・1992『大系日本の歴史① 日本人の誕生』小学館・小学館ライブラリー
- 設楽博己 2013「縄文時代から弥生時代へ」『岩波講座 日本歴史第1巻 原始・古代1』
- 白石太一郎 2006 a「考古学から見た畿内と近国」『列島の古代史 ひと・もの・こと 1 古代史の舞台』岩波書店
- 白石太一郎 2006 b「倭国の形成と展開」『列島の古代史 ひと・もの・こと 8 古代史の流れ』2006 岩波書店
- 須藤護 2013『雲南省ハニ族の生活誌―移住の歴史と自然・民族・共生―』ミネルヴァ書房
- 田中健夫 1993「倭寇」『国史大辞典』14 吉川弘文館
- 寺沢薫 2000『王権誕生』講談社日本の歴史 02、2008 講談社学術文庫
- 鳥越憲三郎・若林弘子 1998『弥生文化の源流考 雲南省佤族の精査と新発見』大修館書店
- 鳥越憲三郎 2000『古代中国と倭族 黄河・長江文明を検証する』中公新書
- 中尾佐助 1966『栽培植物と農耕の起源』岩波新書
- 中村金城編 1910『朝鮮風俗畫譜』富里昇進堂
- 萩原秀三郎 1990『図説 日本人の源郷 揚子江流域の少数民族文化を訪ねて』小学館
- 萩原秀三郎 1996『稲と鳥と太陽の道 日本文化の原点を追う』大修館書店
- 樋口隆康 1971『日本人はどこから来たか』講談社現代新書
- 藤尾慎一郎 2011『〈新〉弥生時代 五〇〇年早かった水田稲作』歴史文化ライブラリー 329 吉川弘文館
- 藤尾慎一郎 2015『弥生時代の歴史』講談社現代新書
- 藤原宏志 1998『稲作の起源を探る』岩波新書
- 松木武彦 2007『列島創世記』小学館 全集日本の歴史 第1巻
- 宮嶋博史 1987「朝鮮半島の稲作展開―農書資料を中心に―」『稲のアジア史 第二巻 アジア稲作文化の展開―多様と統一―』小学館
- 宮嶋博史 1995『両班 李朝社会の特権階級』中公新書
- 宮本一夫 2009『農耕の起源を探る イネの来た道』歴史文化ライブラリー 276 吉川弘文館
- 安田喜憲 2004『文明の環境史観』中公叢書
- 安田喜憲 2009『稲作漁撈文明―長江文明から弥生文化へ―』普及版 2013 雄山閣
- 安田喜憲 2012『龍の文明・太陽の文明』PHP 新書
- 安田喜憲 2016『環境文明論―新たな世界史像―』論創社
- 柳田国男・安藤広太郎・盛永俊太郎他編 1969『稲の日本史』上・下 筑摩書房
- 渡部武 1986「中国農書「耕織図」の流伝とその影響について」『東海大学紀要文学部』第46輯
- 渡部忠世 1983『アジア稲作の系譜』法政大学出版局
- 渡部忠世 1977『稲の道』NHKブックス
- 李春寧 1989『李朝農業技術史』未來社
- 冷泉為人・河野通明・岩崎竹彦 1996『瑞穂の国・日本―四季耕作図の世界』淡交社
- 国立天文台編 1996『理科年表 平成8年』丸善株式会社
- 神宮司廳編『古事類苑 産業部一』1908、普及版 吉川弘文館 1984 「田植」項
- 福島県立博物館 1996『企画展 いにしへの木の匠』
- 横浜市歴史博物館 2002『企画展 東へ西へ 律令国家を支えた古代東国の人々』
- 米沢市『古志田東遺跡』2003